

7 その他の遺構

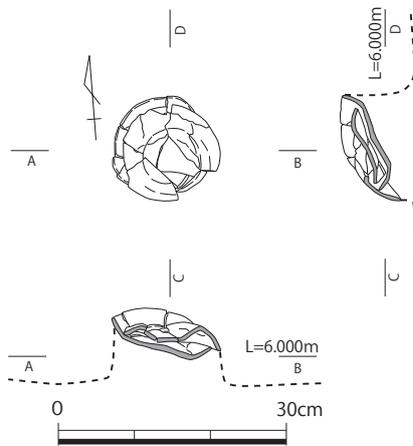
08-SX059 (第5-185図)

合わせ口にした状態

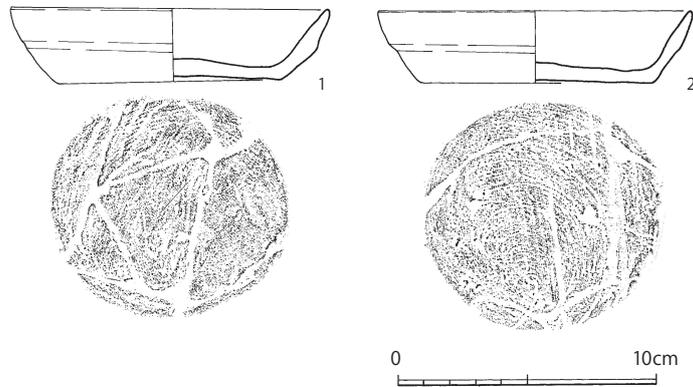
R69区で確認されたもので、土師質土器の坏2枚を合わせ口にした状態で埋置または埋納した遺構である。土師質土器坏2枚は整地層中から検出され、土器が出土した周辺の土壌はやや暗めの色調を帯びていたものの、周辺の土壌との明瞭な変化を認めることはできなかった。従って、土器の埋置または埋納に際し、明瞭な土坑などは設けられていなかったと推定される。遺構の性格は不明であるが、何らかの祭祀遺構、とりわけ「地鎮め」に関連するものである可能性⁽⁵⁾が高い。土器の年代から、遺構の時期はⅡ期（14世紀後半）に比定される。

08-SX059出土遺物 (第5-186図)

1・2は土師質土器の坏である。いずれの資料にも、底部には右回転の糸切り痕のほか、板状圧痕が認められる。製作年代は14世紀後半に比定される。



第5-185図 08-SX059実測図 (1/10)



第5-186図 08-SX059出土遺物実測図 (1/3)

08-SX066 (第5-187図)

被熱した
巨石・礫・
瓦片

R61区で位置する遺構で、安山岩の巨石の北西側に瓦片や礫が集められた状態が検出された。検出された巨石をはじめ、集積された礫や瓦片にも被熱して赤変したものが目立つ。礫や瓦片に混じって、京都系土師器の破片も出土している。これらの礫や瓦片を撤去すると、東西1.18m、南北1.5m、深さ0.5mの楕円形プランの土坑が検出された。この土坑の南側に巨石が埋置されており、土坑の北側には礫や瓦片がぎっしりと詰められた状況が認められた。当初、巨石は「礎石」である可能性を考えていたが、礎石としてはサイズが大きく、平坦面も形成していない。礎石というよりは、庭園などで使用された「景石」であった可能性も考えられるが、それを断定する手掛かりもない。また、土坑については、この巨石が何らかの事情で不要となり、これを廃棄するために掘られたものである可能性も考えられる。しかしながら、現状ではこれ以上の推測を進める材料がないため、遺構の性格は不明としておきたい。出土遺物の中に京都系土師器が存在することから、遺構の時期はⅥ期（16世紀後半）に比定される。なお、この遺構は完掘せずに、現地に埋め戻している。

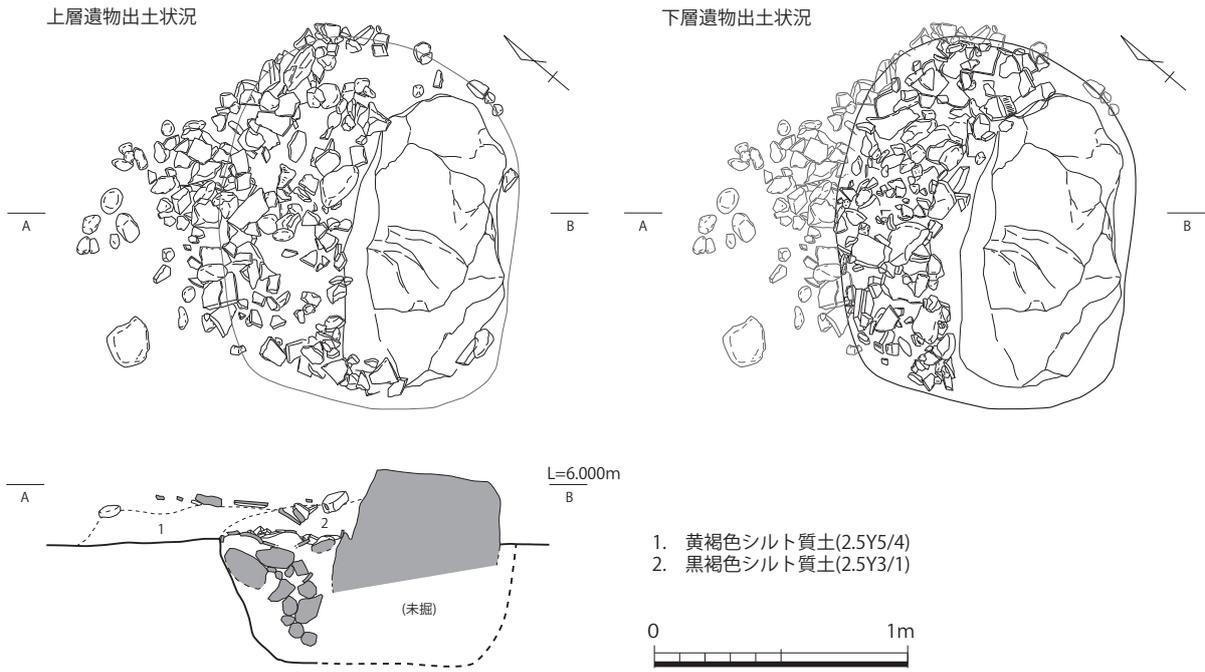
現地に
埋め戻し

08-SX066出土遺物 (第5-188図)

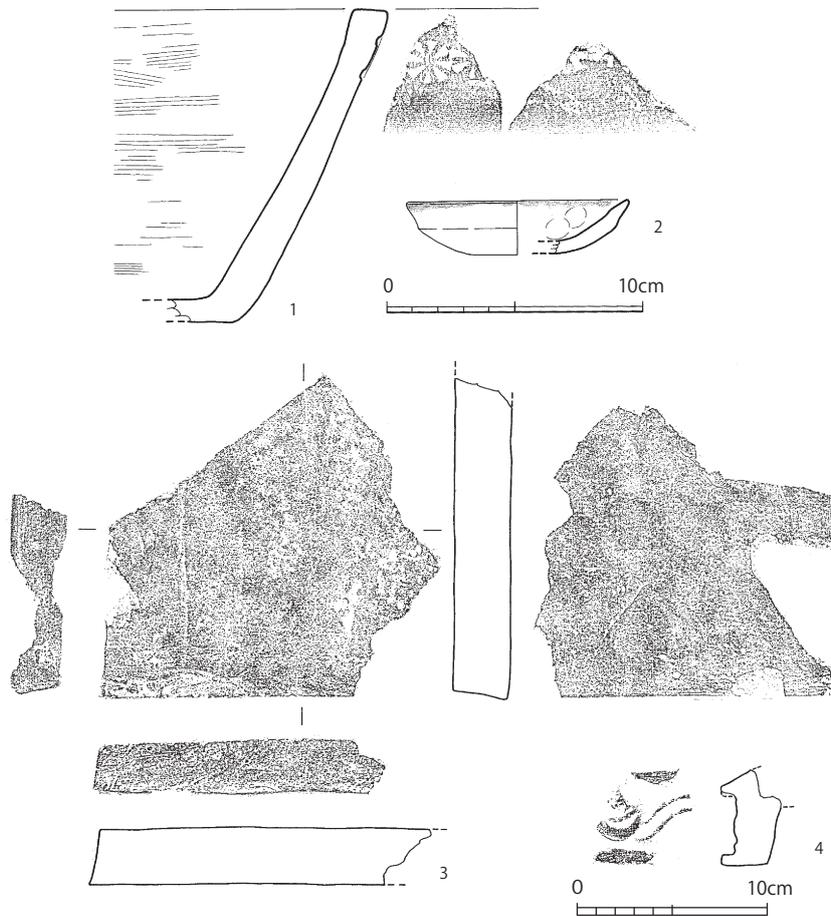
1は瓦質土器火鉢で、口縁部外面に菊花文の刻印が連続して押捺されている。2は京都系土師器皿で、口縁端部内外面にススの付着が認められる。3は埴、4は宝珠唐草文軒平瓦である。

註(5) 合わせ口の状態で出土した土師質土器は、大分県下では15事例が確認されている。

横澤慈「合わせ口のかわラケ」(『先史学・考古学研究と地域・社会・文化論』高橋信武退職記念論集編集委員会 2013年)



第5-187図 08-SX066実測図 (1/30)



第5-188図 08-SX066出土遺物実測図 (1/3、1/4)

瓦片を集積した瓦列

08-SX086 (第5-189図)

Q62～Q63区に位置する遺構で、拳大の大きさの瓦片を集積した瓦列である。その規模は幅約0.5m、長さ約6.2mを測る。この瓦列の側辺は、西側の方に意図的に面を揃えているような印象を受け、その主軸は座標北に対し東に9度振れる。瓦の中には、被熱により赤変しているものが一定量認められた。遺構の性格は不明である。また、使用されている瓦片の数量はかなりの量に及ぶが、その中に遺構の年代を判定できるものは認められない。

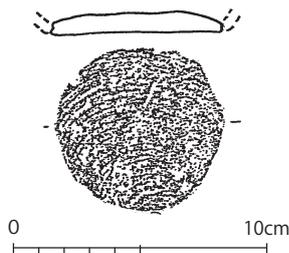
08-SX086出土遺物 (第5-190図)

図示した遺物は、土師質土器杯の底部で、外面に糸切り痕が認められる。土師質土器杯の底部のみを残して円形に加工を施した土製品である。

08-SX355 (第5-191図)

R62区に位置するもので、安山岩の板石を南北4列、東西2列に並べた石列遺構である。その規模は幅1.15m、南北2.15mを測る。この石列遺構のすぐ北側に、前述した性格不明の遺構08-SX086が位置しているため、両者は一連のもののように見える。しかしながら、両者には明らかに切り合い関係にあり、遺構の構築順序は08-SX355→08-SX086となることを確認している。石列は深さ20cm程度の溝状の掘り込みの中に設置されているが、その性格を明らかにすることはできなかった。遺構の内部や周辺からの出土遺物も認められない。従って、遺構の時期は不明であるが、切り合い関係から、VI期(16世紀後半)以前に比定されるものであることは押さえておきたい。なお、この遺構についても完掘せずに、現地に埋め戻している。

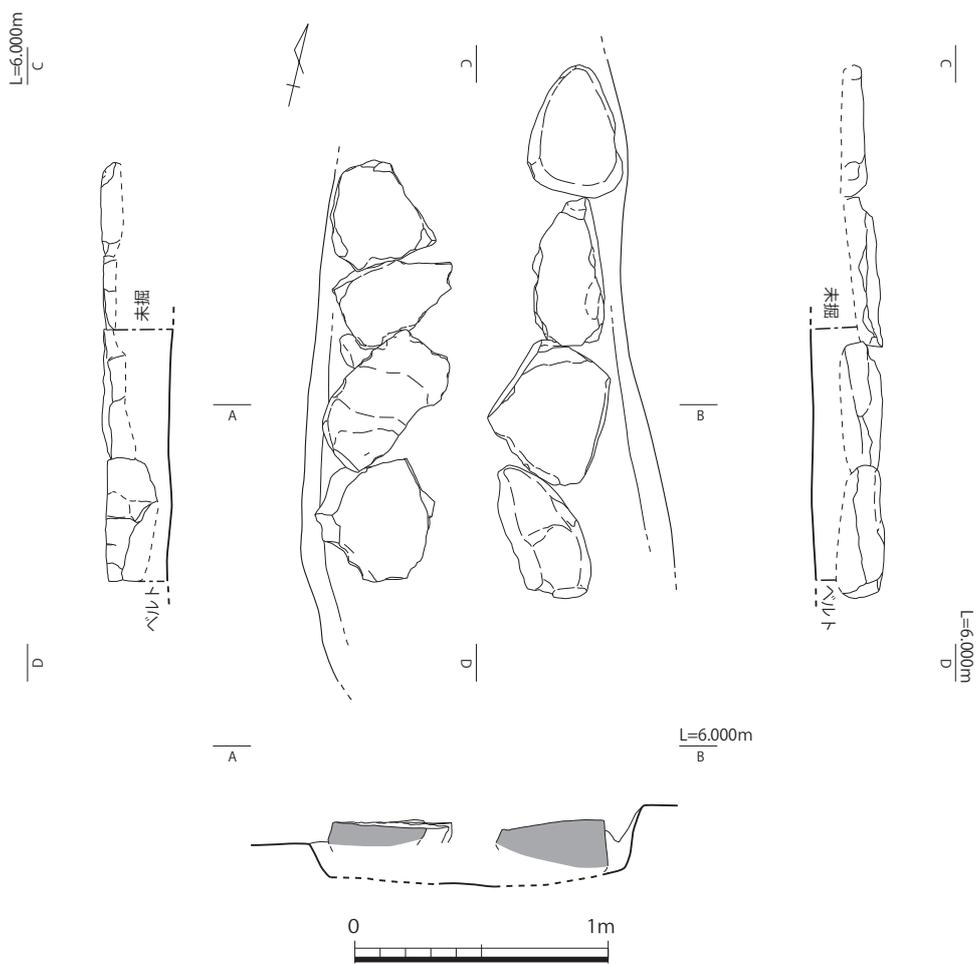
現地に埋め戻し



第5-190図 08-SX086出土遺物実測図(1/3)



第5-189図 08-SX086実測図(1/40)



第5-191図 08-SX355実測図 (1/30)

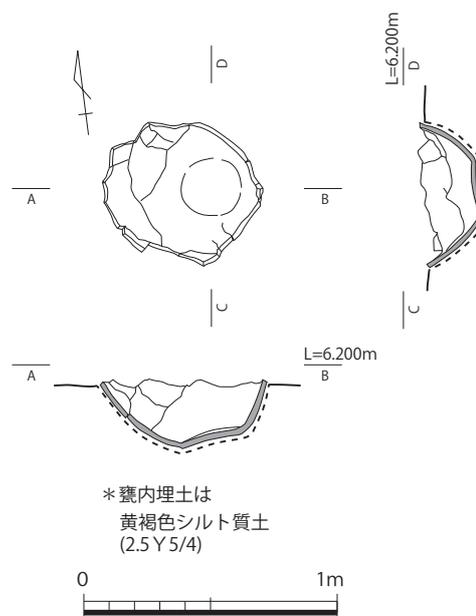
08-SX390 (第5-192図)

東播系
大甕を
設置
した遺構

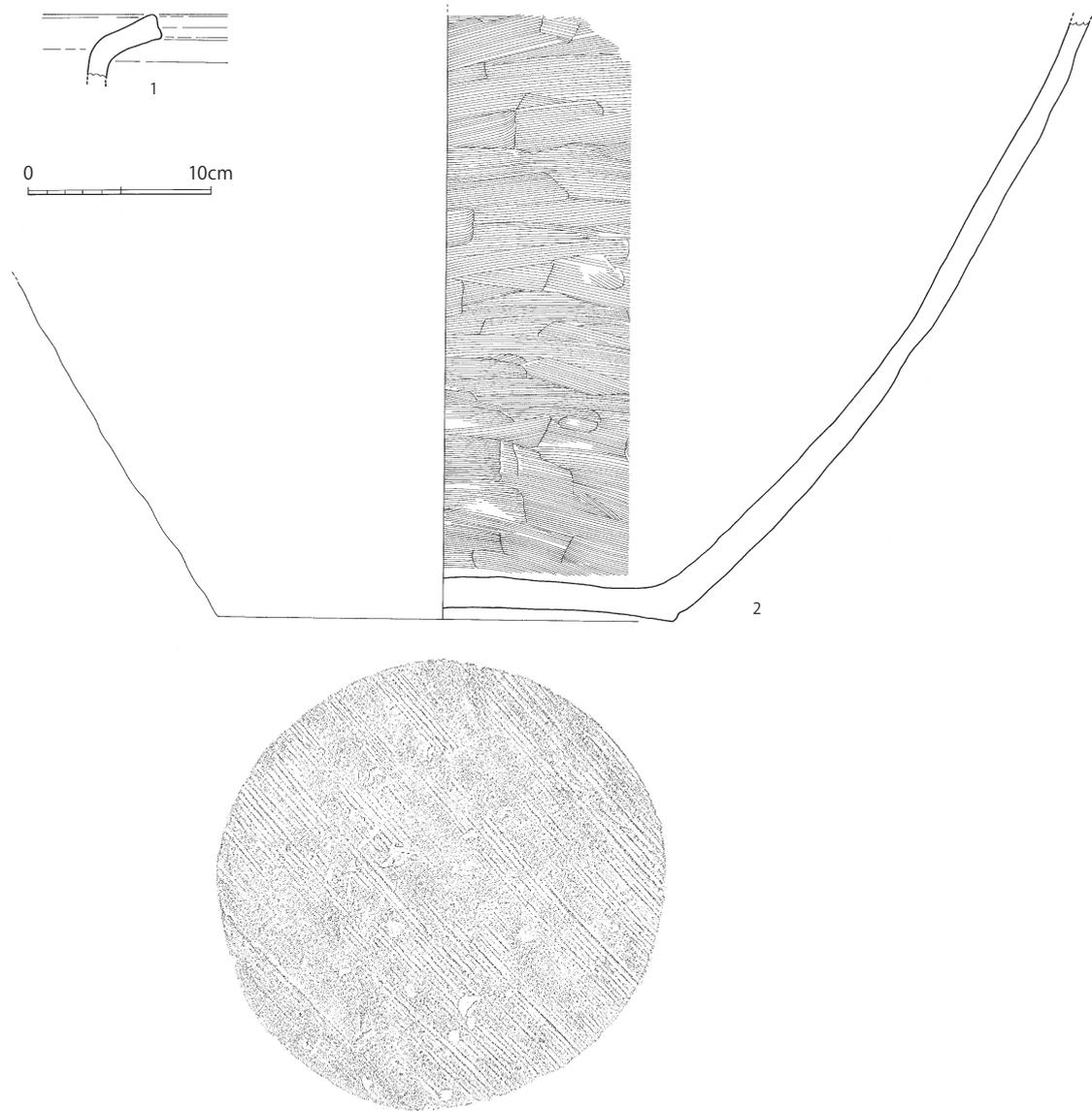
Q62区に位置する東播系須恵器大甕を埋置した遺構である。甕は底部付近のみが原位置を保った状態であり、甕を据えるために掘られた土坑は、甕のサイズより僅かに大型となる。甕は本体をやや西に向けた状態で設置されていた。甕の内部からは甕の破片以外に何も出土しなかったが、その中には口縁部の破片があり、本来甕は底部から口縁部まで完存の状態で見出された可能性がある。甕の製作年代は14世紀代に比定されるが、遺構としての詳細な年代は、それを決める手掛かりがつかめなかった。

08-SX390出土遺物 (第5-193図)

1は東播系須恵器の口縁部、2は同じく底部から胴部下半部の大型破片である。1・2は同一個体の可能性が高い。2は内面に刷毛目状の調整が認められ、底部外面に板状圧痕が認められる。



第5-192図 08-SX390実測図 (1/30)



第5-193図 08-SX390出土遺物実測図(1/4)

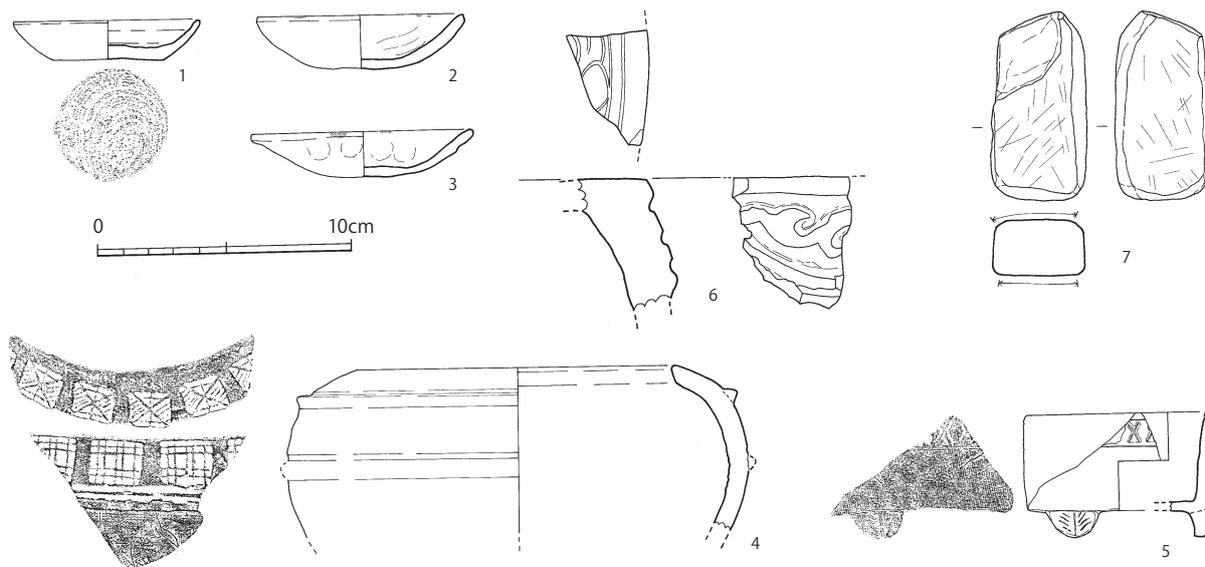
8 包含層・整地層出土の遺物

08-SX055

調査の初期の段階で確認した遺物の集中部で、検出された当該部の位置はP62区からQ62区である。遺物は暗茶褐色土中に包含され、東西約m、南北約mの範囲に広がっていた。堆積していた土壌の厚さは10cm程度である。当該遺構から出土した遺物は少量であり、さらに複数の時期の資料が混在しているため、遺構の時期は不明としておきたい。

08-SX055出土遺物(第5-194図)

1は土師質土器小皿である。底部には回転糸切り痕が認められるが、通常の土師質土器の底部にみられる回転糸切り痕は右回転であるが、当該資料は左回転糸切りとなっており特異である。2・3は京都系土師器の皿で、3の口縁端部にはススの付着が認められる。4は瓦質土器火鉢で、内湾する口縁部を有し、外面には2条の突帯を有する。また、外面には異なる2種類の刻印文様が認められる。5は瓦質土器香炉で、口縁部に2条の細い沈線をもち、沈線間に「×」字状の刻印文様をもち、半円状の脚部をもち、外面に沈線による文様を施している。5は高麗青磁で、墩と呼



第5-194図 08-SX055出土遺物実測図(1/3)

高麗青磁
墩

ばれる製品の破片である。墩とは腰掛けのことで、残存部の天井には刻線による文様がみられ、側面には唐草文の浮き彫り文様が認められる。図化した部位以外にも、小破片が数点出土しているが、図示していない。本資料は、13～14世紀代の製品である。なお、本調査区から南に位置する中世大友府内町跡第87次調査でも、高麗青磁墩の破片の出土が報告されている。高麗青磁墩は、全国的にみても出土事例が希少なもので、旧万寿寺跡においてこのような資料が複数個体存在するような状況は考えにくい。そのような意味からも、府内町跡第87次調査の資料は、本資料と同一個体である可能性が考えられる。現状では、両者は接合していないが、今後の調査で注意が必要とされる資料であろう。7は砂岩を素材とした砥石である。

その他(第5-195図～第5-208図)

図示した遺物は遺構に伴っていない遺物で、包含層・整地層あるいは遺構検出中に出土したものである。

第5-195図1・2は中国龍泉窯系青磁の碗で、いずれも底部および高台周辺の破片である。3・4は龍泉窯系青磁の香炉で、3は口縁部、4は底部付近の破片で、後者には脚部の基部が残存する。6は龍泉窯系青磁の皿または鉢の見込み部分で、型打ち成形による魚文の一部が残存する。5も龍泉窯系青磁の瓶または水注の把手である可能性がある。7は青磁の蓋の破片で、残存部の端に穿孔の痕跡が認められるほか、貼付による文様の一部が残存している。8～10は中国産の白磁で、8は四耳壺の口縁部、9は梅瓶の頸部、10は外面に連弁文がある合子の口縁部である。11は中国産陶器の茶入で、底部付近の破片である。外面に黒釉を施し、底部外面と内面は露胎となる。12・13は中国産の天目碗である。14は華南三彩で、壺などの袋物の破片であろう。外面に沈線による連弁文が施されている。15～17も華南三彩で、同一個体の可能性がある製品である。香炉などの器形と思われ、15・16は口縁部から胴部上半、17は底部付近の破片と思われる。18は青釉陶器小皿で、口縁部付近の小破片である。19は高麗青磁で、外面に象嵌文様が認められる。20は瀬戸美濃産陶器で、口縁部が輪花となる入子の小皿である。21は瀬戸美濃産陶器の卸皿である。22は備前焼水屋甕で、粘土紐で形成されている耳部の破片である。

22・23は京都系土師器の皿で、いずれも内外面にススの付着が認められる。器壁がやや薄いという特徴から、16世紀前葉から中葉の製品である。25～30は土師質土器皿で、色調が淡褐色を呈し、器壁が薄いという特徴がある。15世紀後半前後に比定される周防産の製品で、搬入された製品と推定される。28の底部には貫通孔が設けられている。31・32は胎土が赤褐色を呈する在地系の製品で、31は小皿、32は坏である。31は15世紀後半、32は15世紀前半から後半に比定される。32の底部には糸切り痕のほかに、板状圧痕が認められる。

第5-196図33～第5-197図66は土師質土器で、いずれも14世紀代に比定される製品である。33は胎土が白色を呈することから、搬入品である可能性がある。34～46は小皿で、器高がやや高くなる製品。47～53は器高が浅くなる小皿で、在地系のものである。53には底部に貫通孔が認められる。54も小皿であるが、本来は坏で、底部近くの胴部に再加工を施し、口縁部を作出している。55および57～66は土師質土器坏で、14世紀代に比定される在地系の製品である。66には底部内外面に赤彩の痕跡が認められる。56は9世紀代に比定される土師器坏で、底部はヘラ切り離しとなる。口縁部内面と胴部の一部にススの付着が認められる。

67～69は瓦器である。67は和泉型瓦器碗の底部破片で、見込みにヘラミガキが認められる。68は皿で、見込みにヘラミガキが施され、底部には糸切り痕がある。69は碗で、見込みにヘラミガキが施されている。在地系の製品であろう。

第5-198図70～第5-199図102は瓦質土器である。70は火鉢で、底部近くの胴部外面に細い2条の突帯を有し、その間に双頭蕨手文を刻印する。16世紀後半の製品。72も火鉢で、口縁外面に2条の突帯を有し、その間に菊花文を刻印する。73～81は風炉または火鉢で、いずれも特徴的な刻印が施されている。82～87は火鉢の類と思われる、外面に木の葉状の刻印が施されている。木の葉状文の上端は宝珠となっている。88～93は香炉で、口縁部外面に菊花文の刻印を有する。また、88と89には「施」と「水」の刻字がある。94は口縁部が内側に湾曲する器形をもつ火鉢で、口縁部外面に崩れた菊花文を刻印する。95は火鉢類の付属品と思われる。器形は江戸時代後期以降に出現するものと類似するが、胎土や色調の様相が当該時期のものとは異なるため、製作年代が中世に遡る可能性を考えている。96～100は土鍋で、96～98は鏝状の口縁部、99・100はくの字状の口縁部をもつ。101は風炉あるいは火鉢の脚部、102は把手付の土鍋である。

103～108は8～9世紀代に比定される製品で、混入品と思われる。103は緑釉陶器皿の底部で、内外面に緑釉が施される。104・105は黒色土器で、器表面にヘラ磨きが施されている。106・107は土師器の坏で、107の内外面にはヘラミガキが顕著に認められる。108は土師器の蓋で、内面にヘラミガキが目立つ。109は須恵器の壺の底部から胴部下半部の破片である。

第5-200図1～22は土錘である。1・2は大型の有溝土錘、3・4は小型の丸形有溝土錘である。3・4は貫通孔と溝をもつもので、旧万寿寺跡において、この種の形態の丸形有溝土錘は14世紀代に比定されることが判明している。5～20は管状土錘、21・22は有孔土錘である。21・22は古墳時代の製品で、混入品である可能性が高い。23は土鈴の基部、24は円形の土器片加工品である。25～36は石製品である。25はチャート製の火打ち石で、「六太郎石」と呼ばれる地元の石が使用されている。26～30は滑石製石鍋の破片である。このうち、31・32には穿孔が設けられており、温石として再加工されている可能性がある。33は軽石製の小型容器で、略円形の素材に窪みが設けられている。34～36は硯で34・35は黒色粘板岩、36は輝緑凝灰岩が使用されている。

第5-201図1～19は砥石で、いずれも砂岩質の岩石が使用されている。

20～29は金属製品で、20は青銅製の権、21～29は鉄釘である。

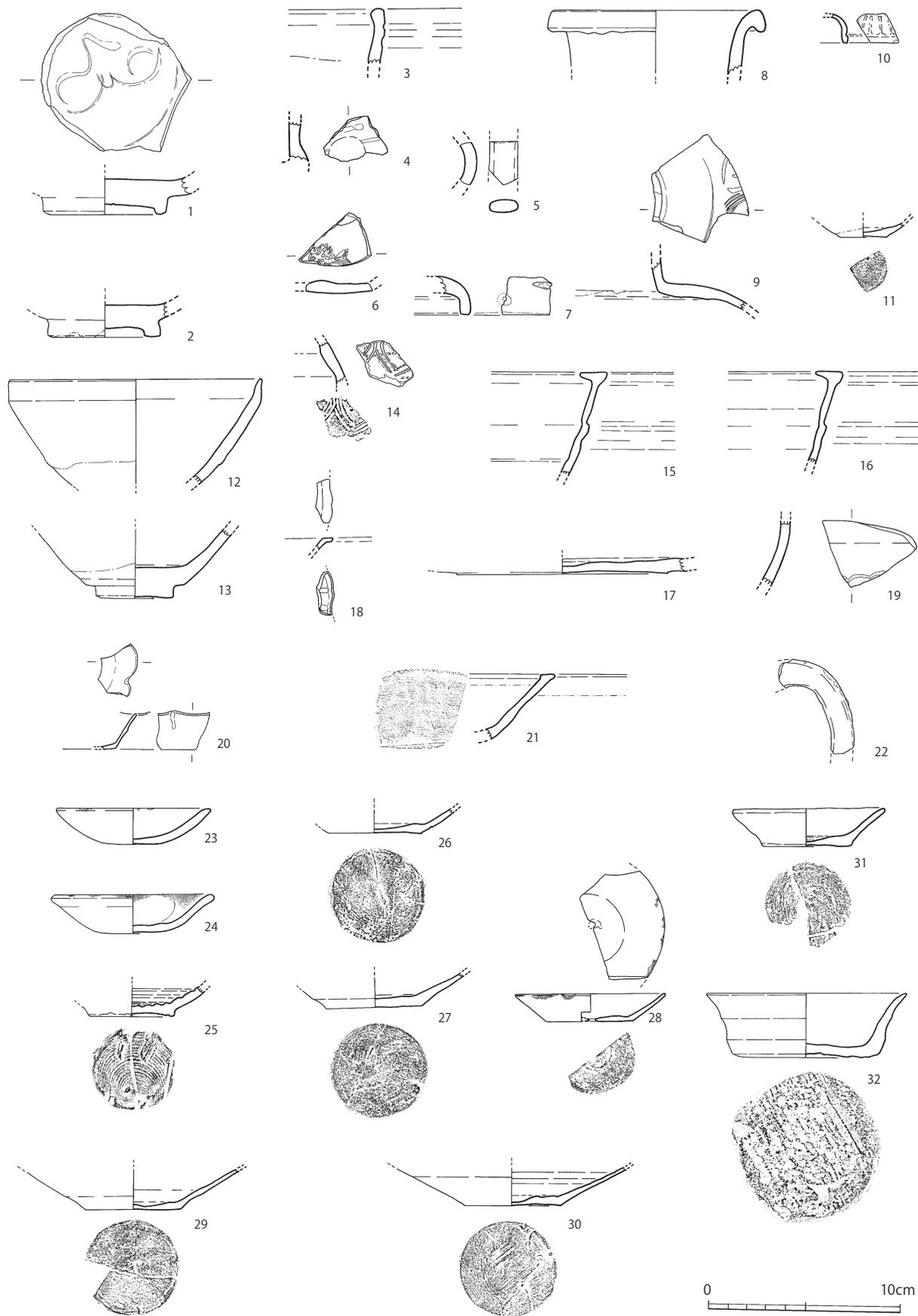
第5-202図1～17図は銅銭である。

第5-203図～第5-208図は瓦磚類である。

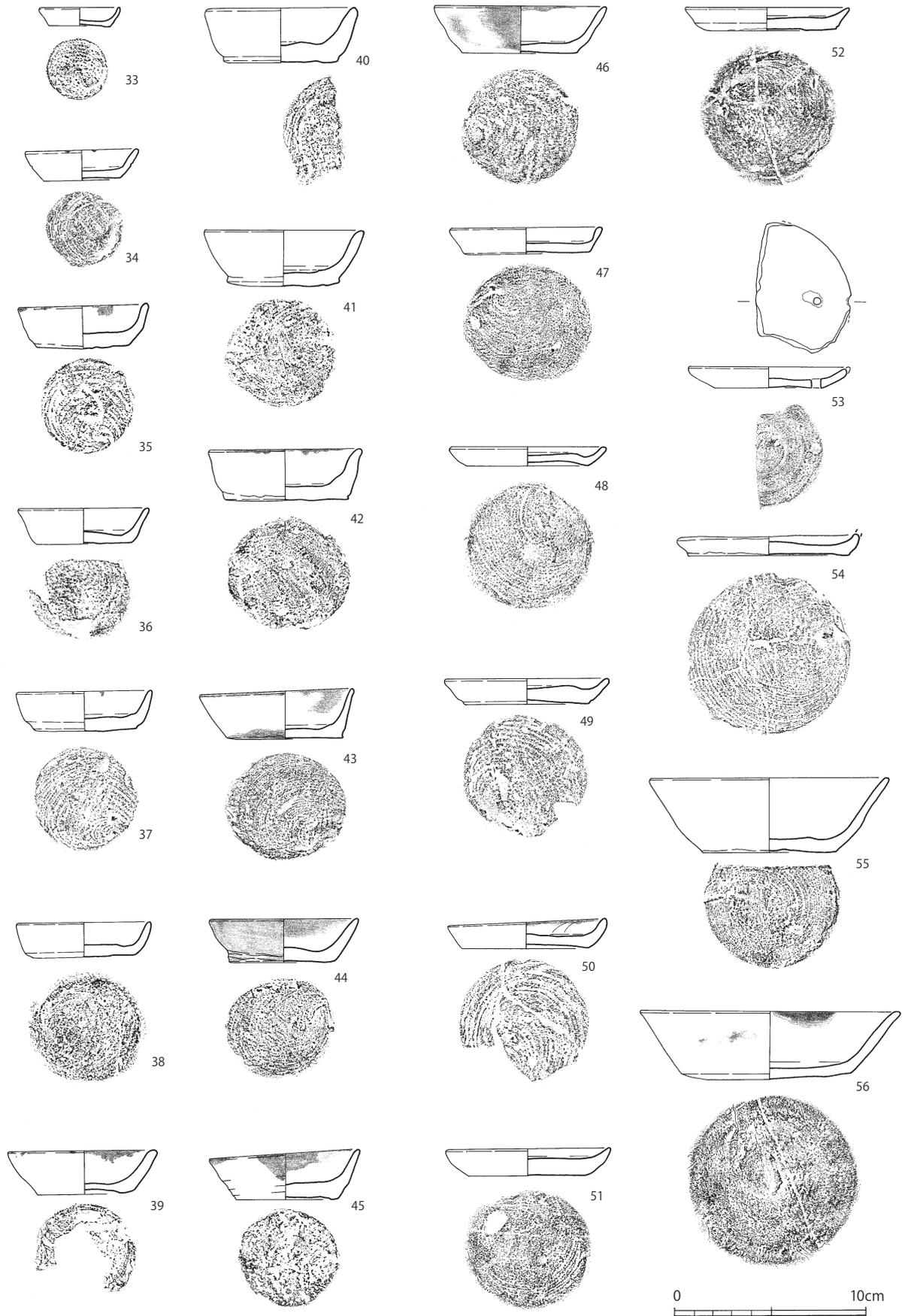
「施」・「水」
の刻字

火打ち石
六太郎石

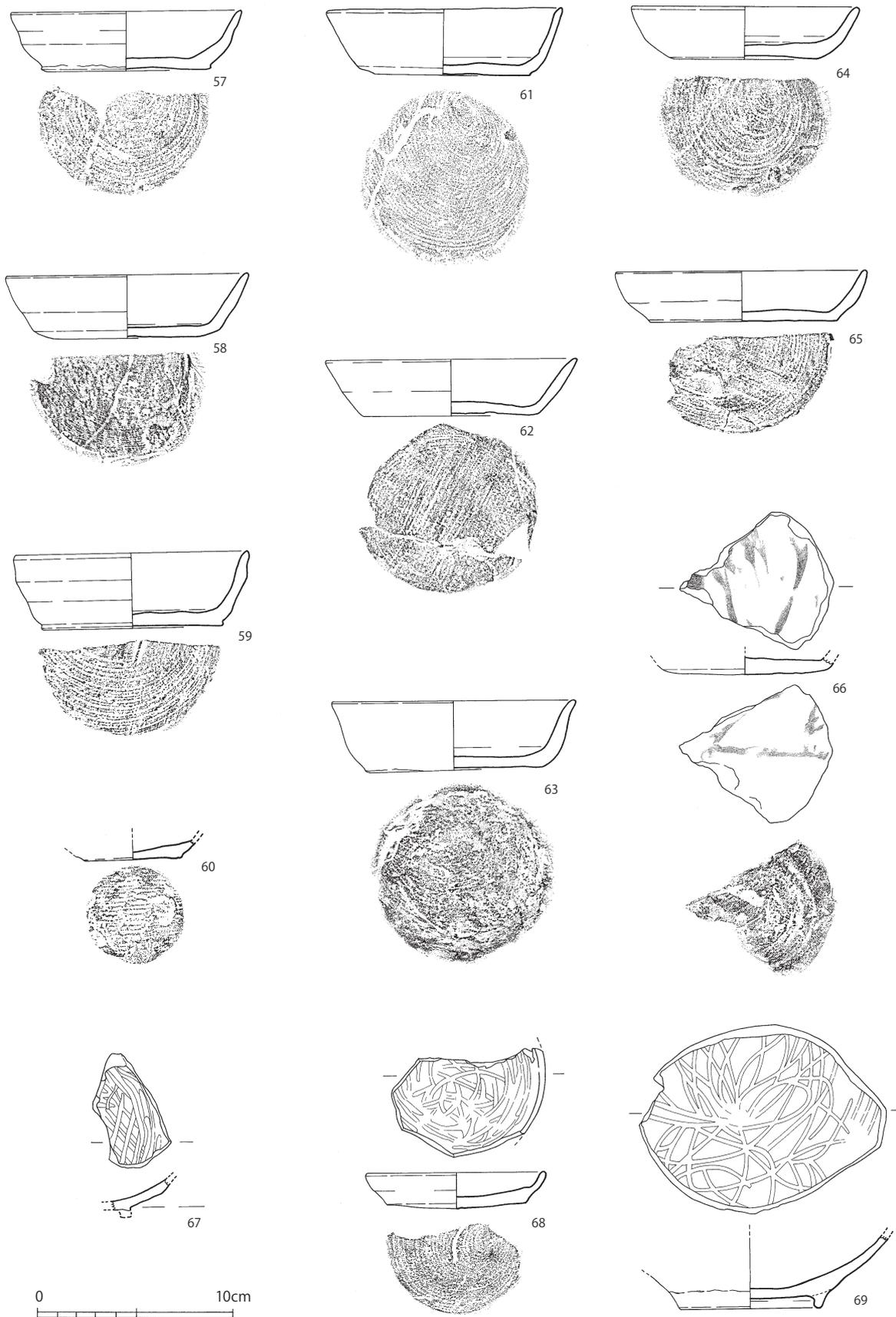
権



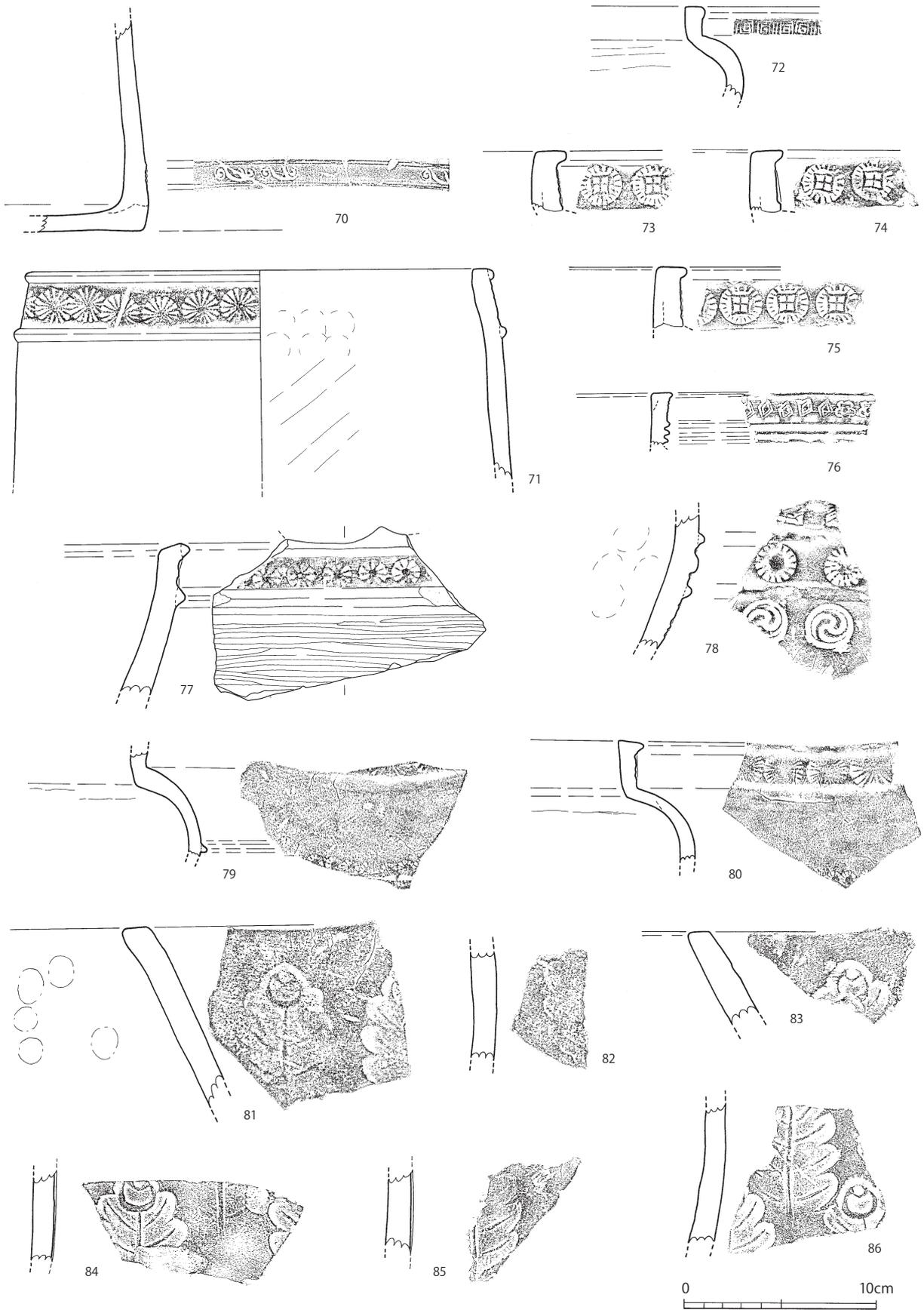
第5-195図 包含層・整地層出土遺物① (1/3)



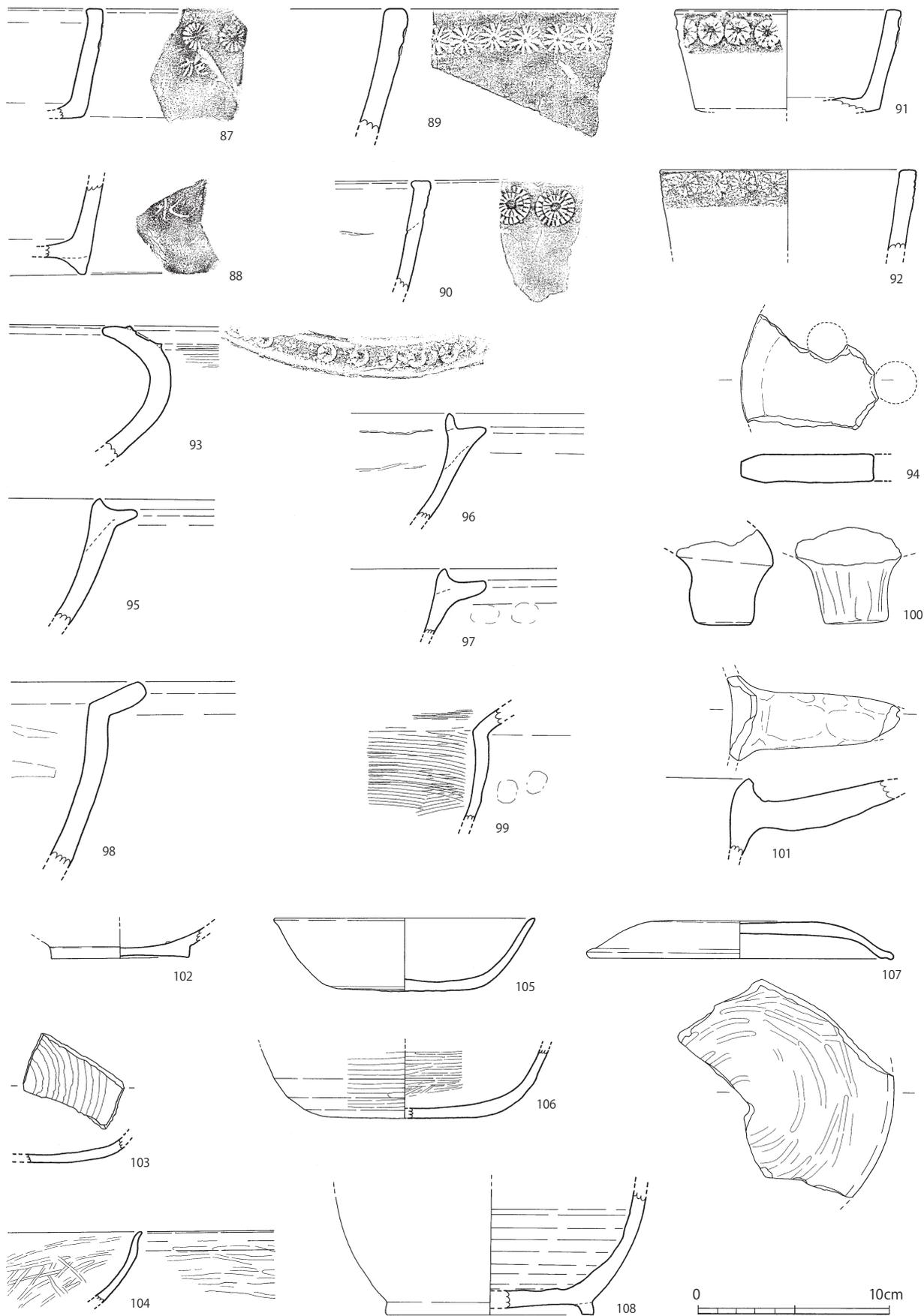
第5-196図 包含層・整地層出土遺物② (1/3)



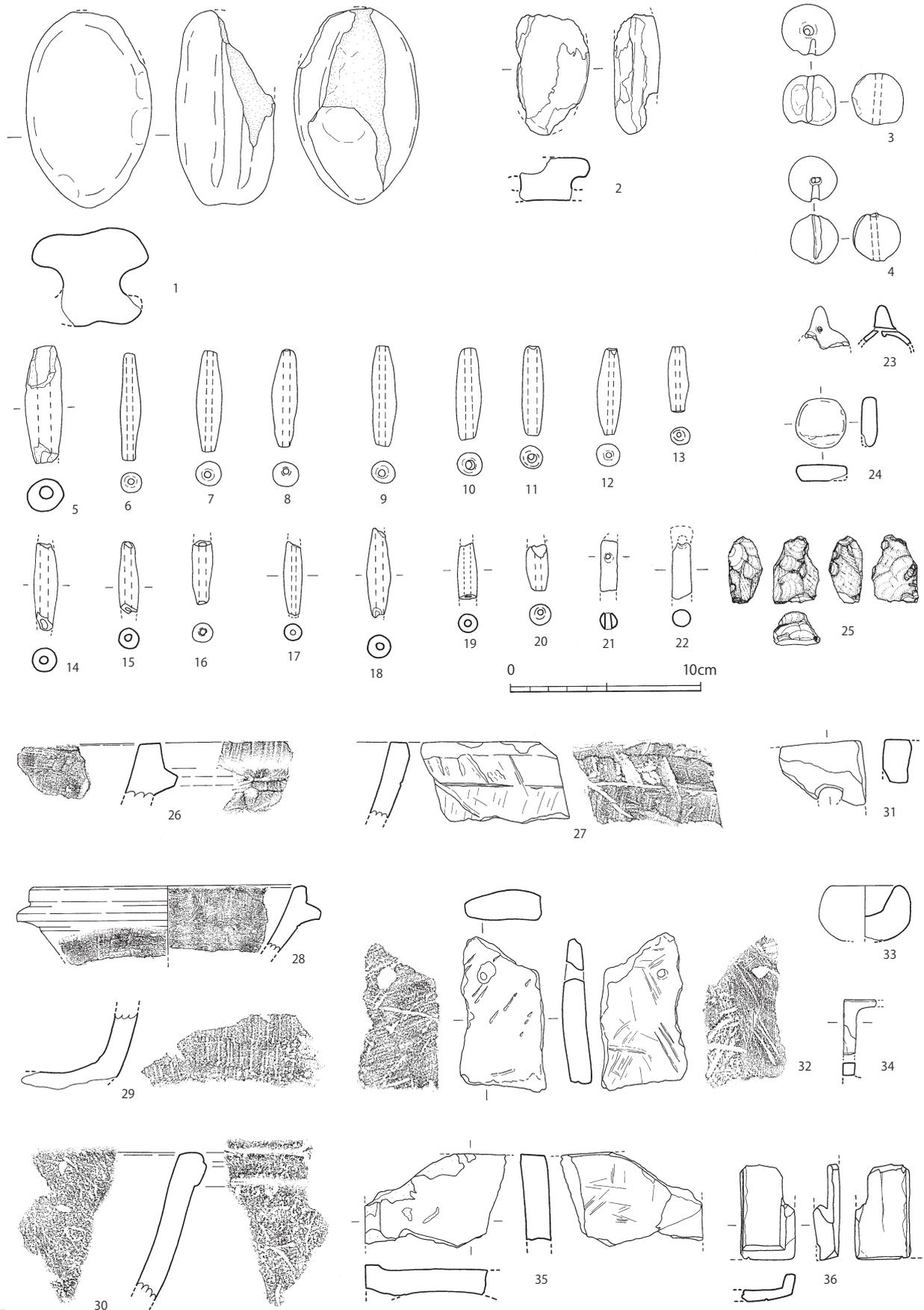
第5-197図 包含層・整地層出土遺物③ (1/3)



第5-198図 包含層・整地層出土遺物④ (1/3)



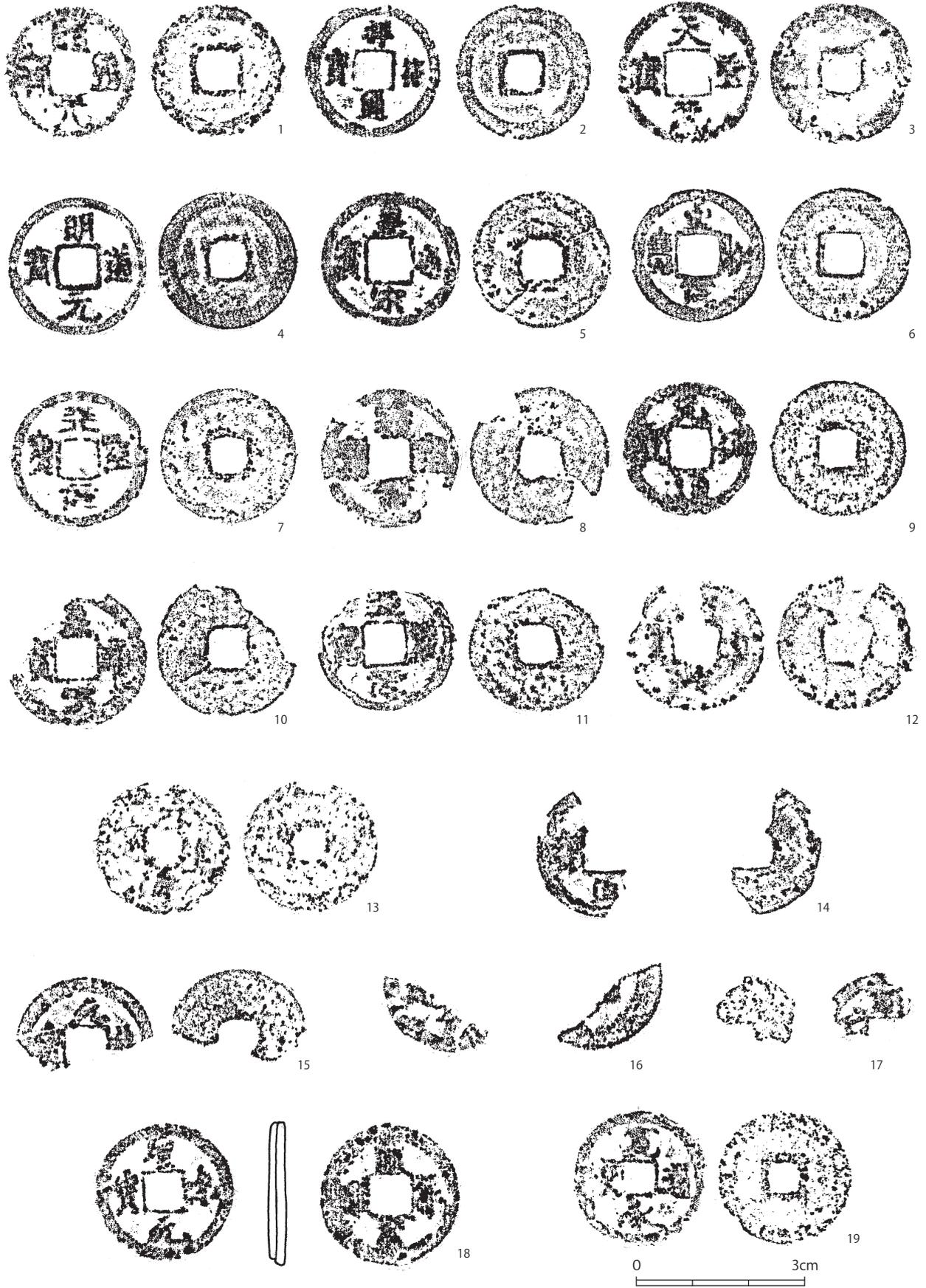
第5-199図 包含層・整地層出土遺物⑤ (1/3)



第5-200図 包含層・整地層出土遺物⑥ (1/3)



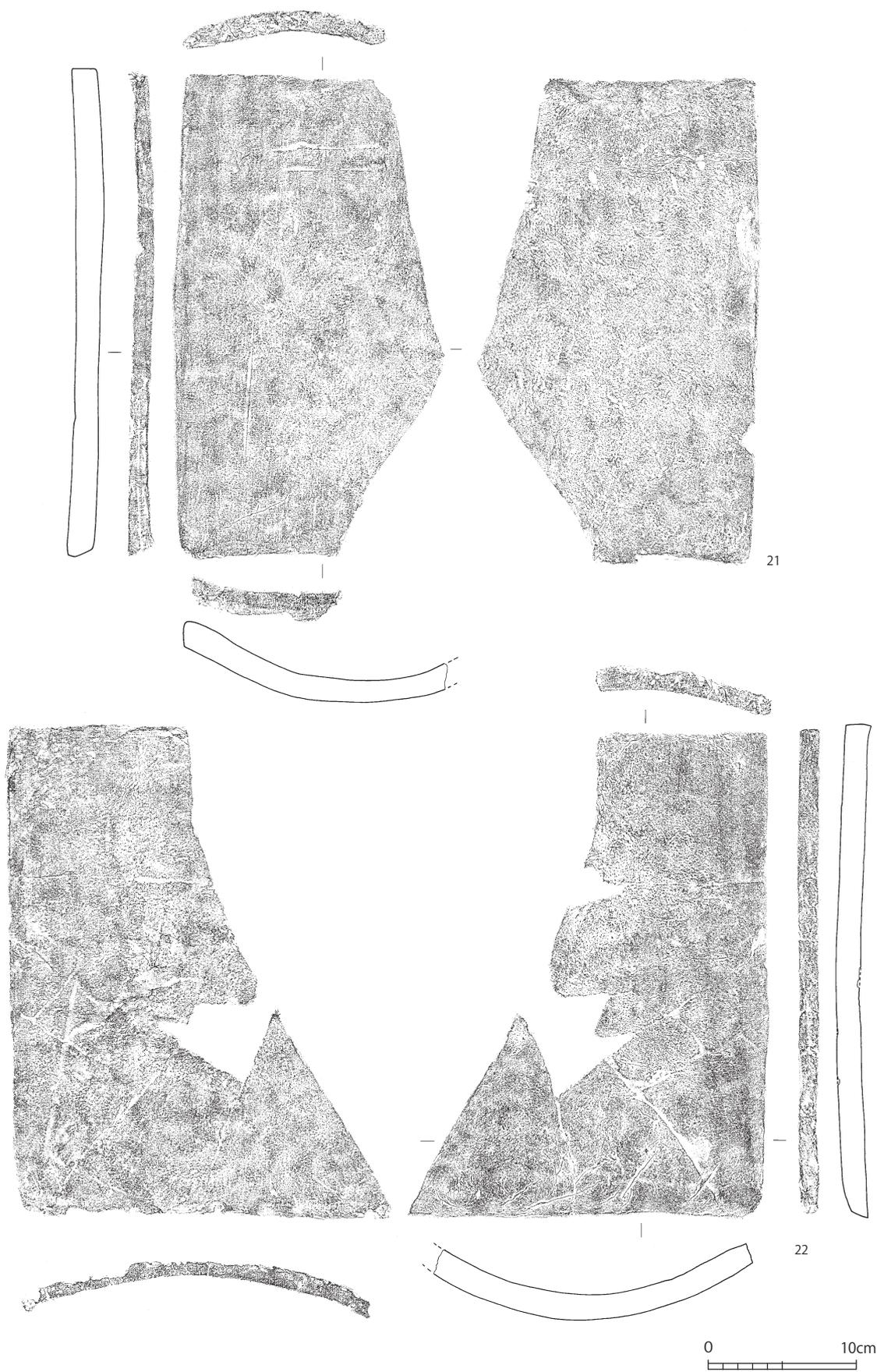
第5-201図 包含層・整地層出土遺物⑦(1/3)



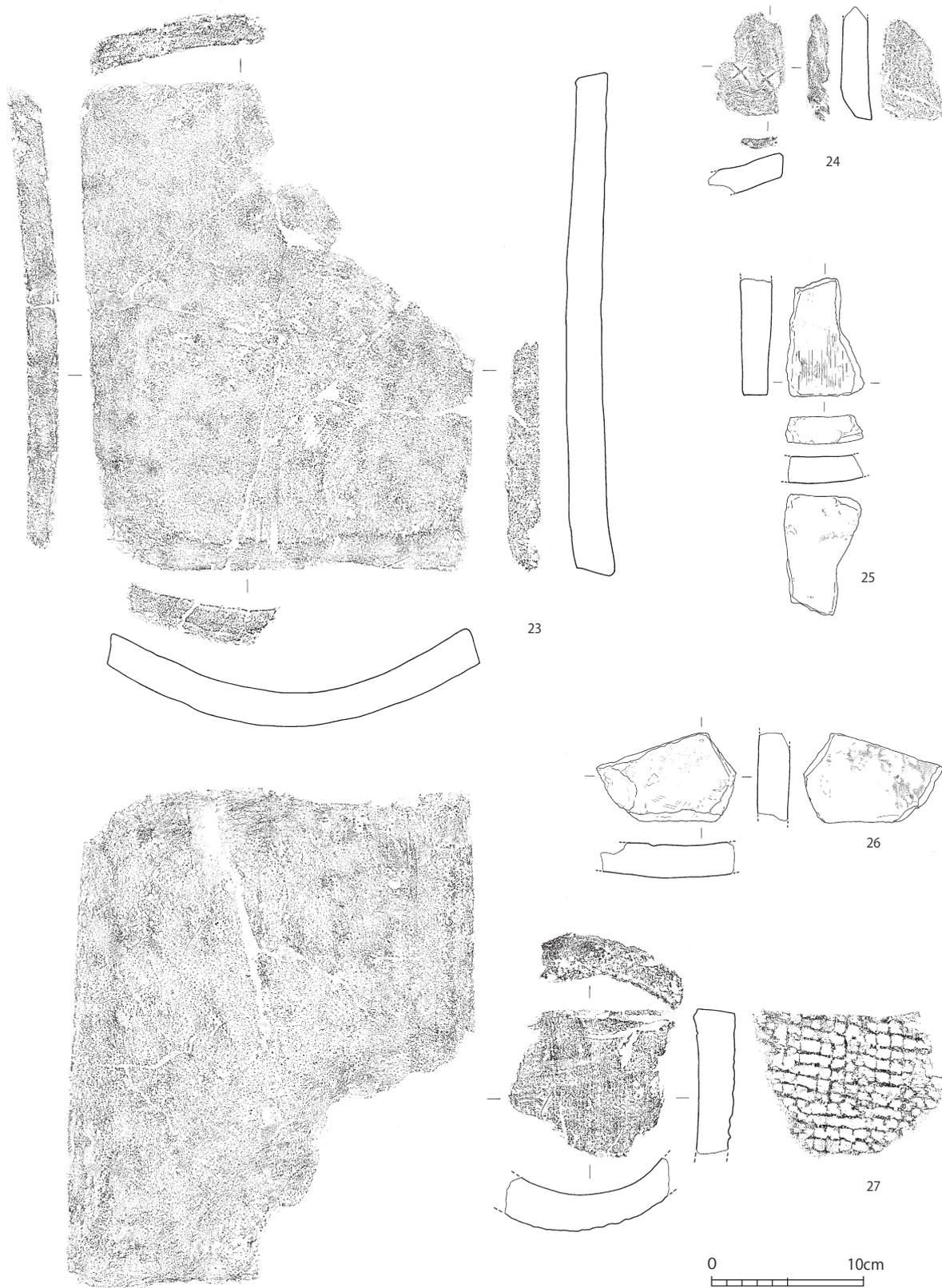
第5-202図 包含層・整地層出土遺物® (1/1)



第5-203図 包含層・整地層出土遺物⑨ (1/4)



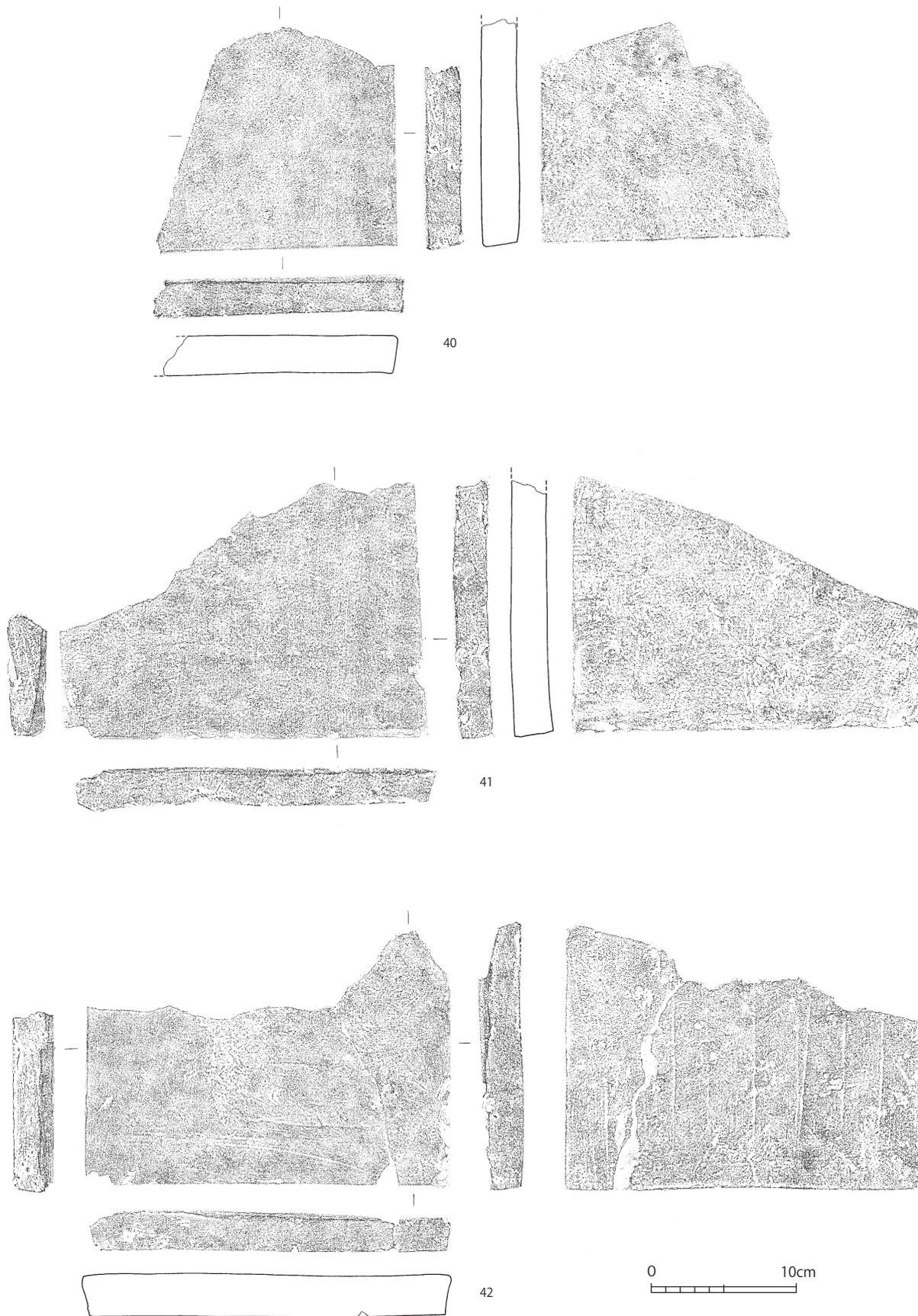
第5-204図 包含層・整地層出土遺物⑩ (1/4)



第5-205図 包含層・整地層出土遺物①(1/4)



第5-206図 包含層・整地層出土遺物② (1/4)



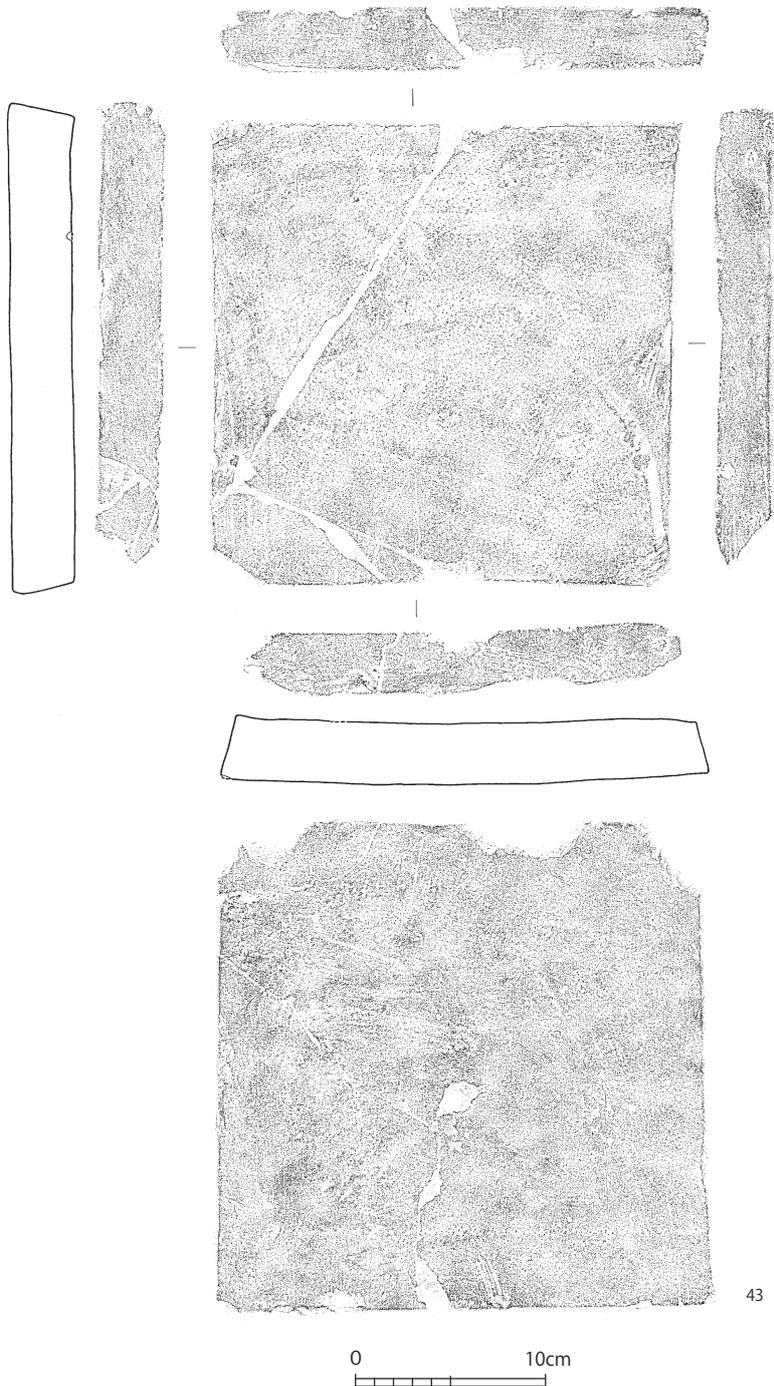
第5-207図 包含層・整地層出土遺物⑬ (1/4)

第5-203図1～13は軒平瓦である。このうち、1～3の連珠文軒平瓦、5の蓮華唐草文軒平瓦は万寿寺創建時の所用瓦と推定される。14～20は軒丸瓦である。

第5-204図・第5-205図21～29は平瓦である。このうち、24の凹面には「×」字状の記号が認められる。また、25・26には赤色顔料の痕跡が認められる。27は凸面に格子目、凹面に布目が残るもので、8～9世紀代に比定される。

第5-206図28～33は鬼瓦、34～36は丸瓦である。このうち、36は8～9世紀代の古代瓦と思われ、凸面に横方向のカキ目が施されている。37・38は面戸瓦と思われる製品である。37は端面に○の中に「井」字状の刻印がある。また、38には赤色顔料の付着が認められる。39は瓦質または瓦埴であるが、用途不明の製品である。表面に「松岩□」の刻字が認められる。

第5-207図・第5-208図40～43は埴である。



第5-208図 包含層・整地層出土遺物⑭(1/4)

「松岩□」
の刻字

第6章 旧万寿寺跡第9次調査

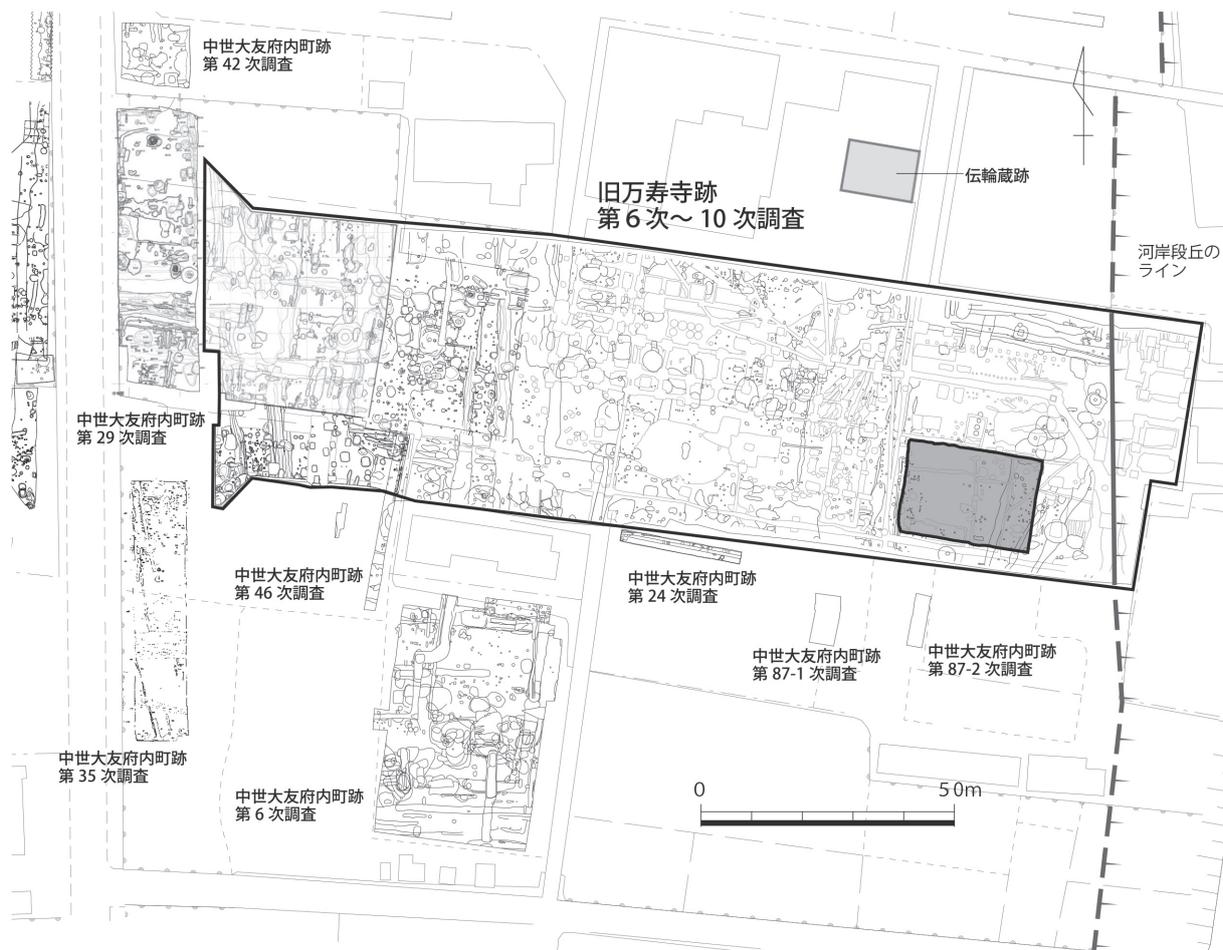
第1節 調査の概要

調査期間
平成26年
5月22日～
9月16日

調査面積
492.9㎡

旧万寿寺跡第9次調査（第6-1図）は、第8次調査と平行して平成26年度に実施した。調査区の位置は旧境内地の南東部に当たり、平成21年度に行われた大分市教委⁽¹⁾による確認調査において、この周辺は遺構の希薄な空閑地とされている。調査区は南北約18m、東西約26.5mの長方形を呈し、調査面積は492.9㎡である。平成26年5月22日に調査を開始し9月16日に終了したが、調査区内は現代の攪乱や削平を受けた部分が多く旧万寿寺に関わる遺構は非常に少ない。また、遺構掘削の完了後、古代以前の包含層の確認調査のためトレンチ2箇所を設定して実施し、標高4m余りに堆積する青灰色砂層の上面から縄文時代から弥生時代の土器片数点が出土した。

調査区のはほぼ全域に現代の造成による整地層や埋土層が1～1.2m余り堆積し、標高5.5m前後で淡茶褐色土の遺構検出面が現れる。検出された遺構は、9世紀前半代の溝1条・土坑3基・柱穴、14～16世紀の土坑4基・井戸1基などである（第6-2図）



第6-1図 旧万寿寺跡第9次調査の位置 (1/15,000)

註(1)大分市教育委員会『大友府内17 中世大友府内町跡第87次調査報告書』2010年



第6-2図 旧万寿寺跡第9次調査 遺構配置図 (1/200)

第4表 旧万寿寺跡第9次調査主要遺構一覧表

遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	遺構の位置	遺構の時期	特記事項	掲載頁
09-SD001	S001	溝	AB66 ~ AB67区	9世紀中頃		156
09-SK002	S002	土坑	AA67区	I ~ III期 (14世紀 ~ 15世紀前半)		158
09-SK003	S003	土坑	AB66 ~ AB67区	IV ~ V期 (15世紀後半 ~ 16世紀前半)		159
09-SK004	S004	土坑	AB65区	VI ~ VII期 (16世紀後半 ~ 末)		160
09-SK005	S005	土坑	AB66区	II ~ V期 (14世紀後半 ~ 16世紀前半)		160
09-SK006	S006	土坑	AB67区	V ~ VII期 (16世紀前半 ~ 末)		160
09-SE007	S007	井戸	AB65区	IV期 (15世紀中頃 ~ 末)		163
09-SP009	S009	柱穴	AA66区	8世紀後半		166
09-SK010	S010	土坑	Z66区	8 ~ 9世紀		164
09-SK013	S013	土坑	Z66区	9世紀中頃		165
09-SP025	S025	柱穴	Z66区	9世紀前半		166
09-SP027	S027	柱穴	Z65区	8 ~ 9世紀		166
09-SP031	S031	柱穴	Z66区	9世紀前半		166
09-SP032	S032	柱穴	Z66区	9世紀前半		166
09-SP033	S033	柱穴	Z66区	9世紀中頃		166
09-SP034	S034	柱穴	Z67区	9世紀前半		166

第2節 遺構と遺物

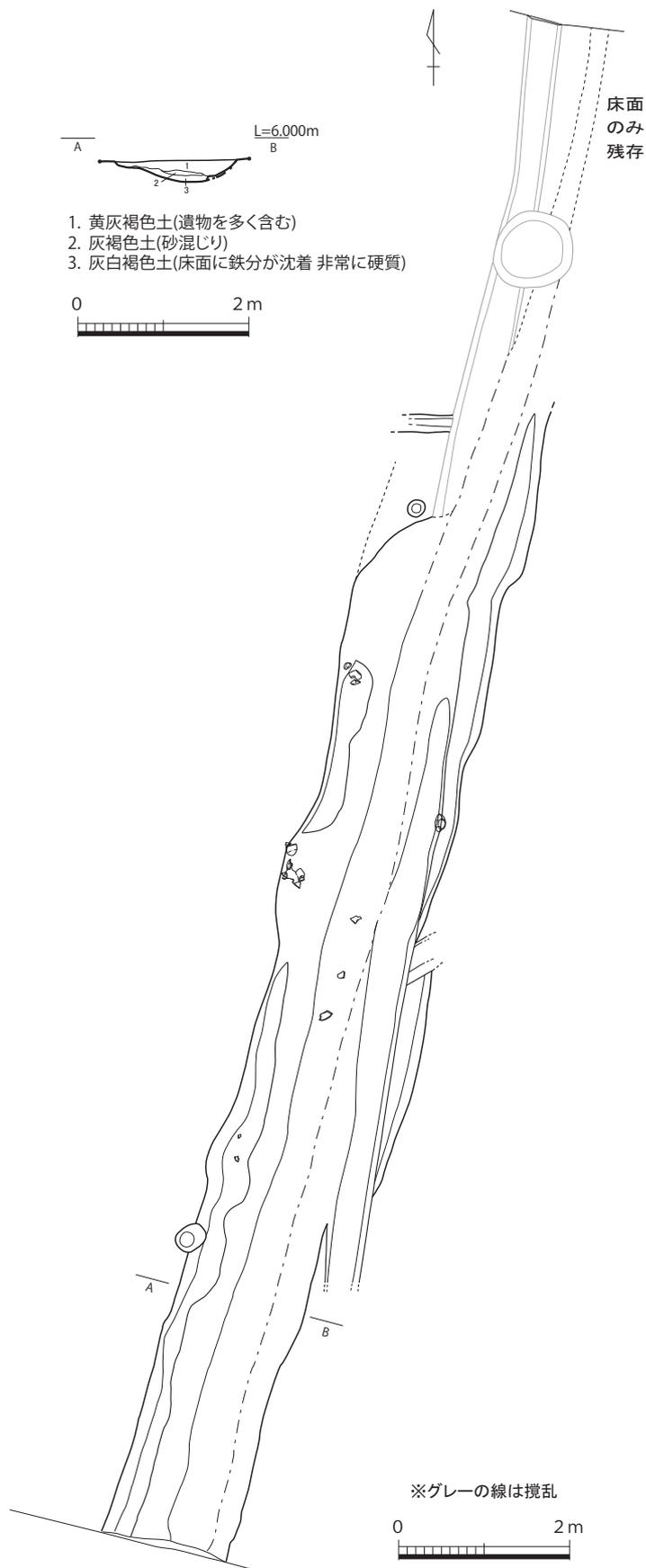
09-SD001 (第6-3図)

調査区東側のAB区で検出された溝状遺構、中央部から北側は現代の攪乱と削平を大きく受け床面の一部しか残存しない部分もある。南北方向に設けられ、現存長約13m、溝幅1.4～1.8m、深さ0.2～0.3mを測り、断面は浅い皿状に近い形状をなす。南側から北側に傾斜し、床面には鉄分が沈着しており水が流れていたことを示している。土層は3層に分かれるが土師器や須恵器を中心とする遺物は、検出面や上層の黄灰褐色土層から多く出土した。9世紀中頃に置かれる遺構である。

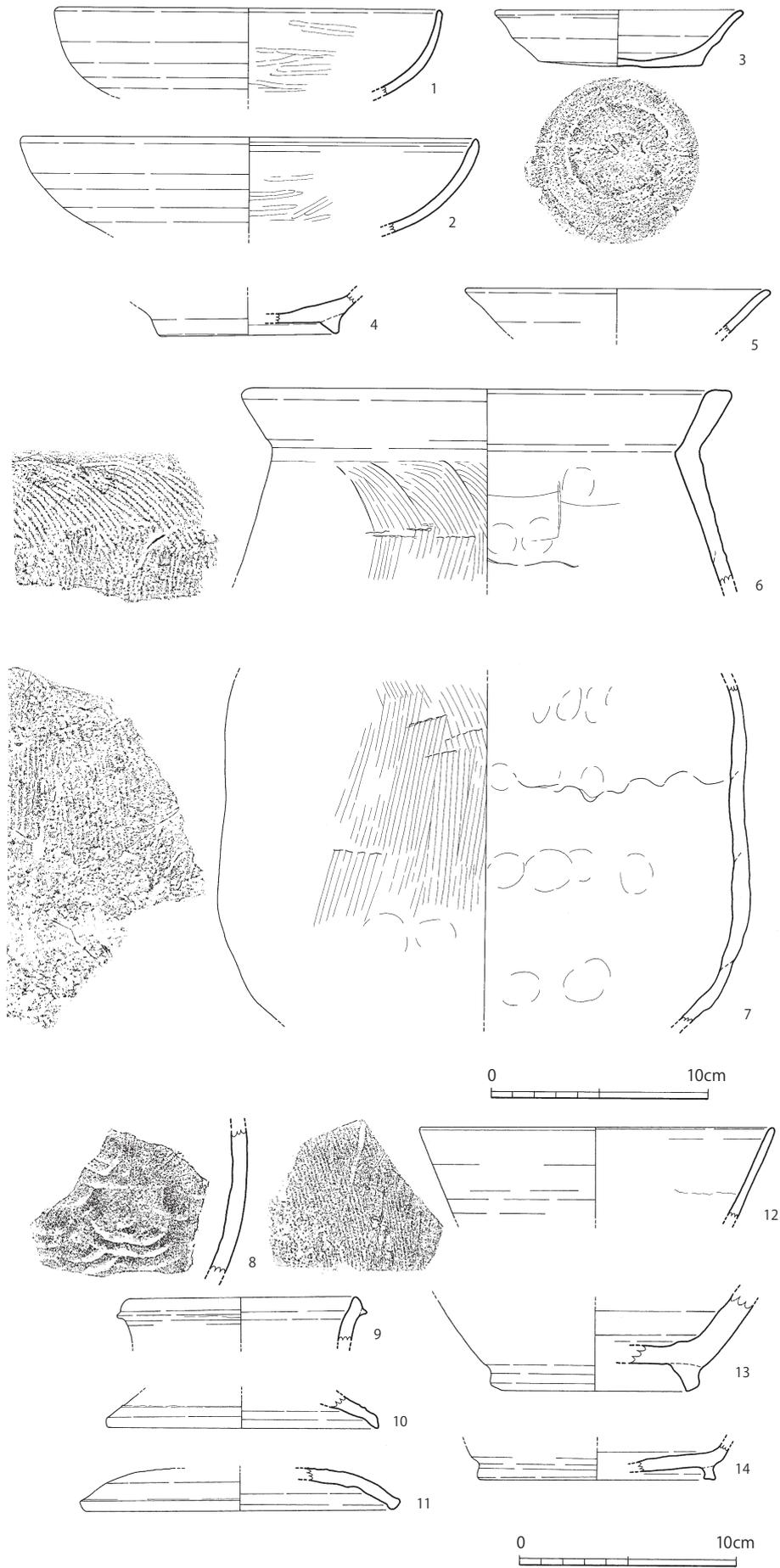
9世紀中頃の溝

09-SD001出土遺物 (第6-4図)

1・2はやや丸みを帯びる体部を持つ土師器碗で、内面は横方向のヘラミガキが施され外面はヨコナデ調整。これらは胎土に砂粒をほとんど含まず、明橙褐色を呈するもので、8世紀後半の所産。3はやや外反気味に外に開く坏、口径11.3cm、器高1.6cmを測り、底部は回転ヘラ切離しで、9世紀中頃に置かれよう。4は三角形に近い高台を付す碗で、9世紀前半に属する。5は口縁部がやや大きく外に開く坏で、3と同時期に置かれよう。6・7は同一個体と思われる土師器甕で口縁部はヨコナデ、胴部外面に斜め方向のハケを施す。胎土に白色粒や金雲母をやや多く含み、8世紀後半の所産か。第6-5図8は土師器甕の胴部片で外面はハケ調整、内面には同心円状の叩痕が残り、6・7と同時期に置かれる。9～14は須恵器片で、9は外面に1条の突帯を巡らす壺の口縁部。10・11は蓋の口



第6-3図 09-SD001実測図 (1/80)



第6-4図 09-SD001出土遺物 (1/3)

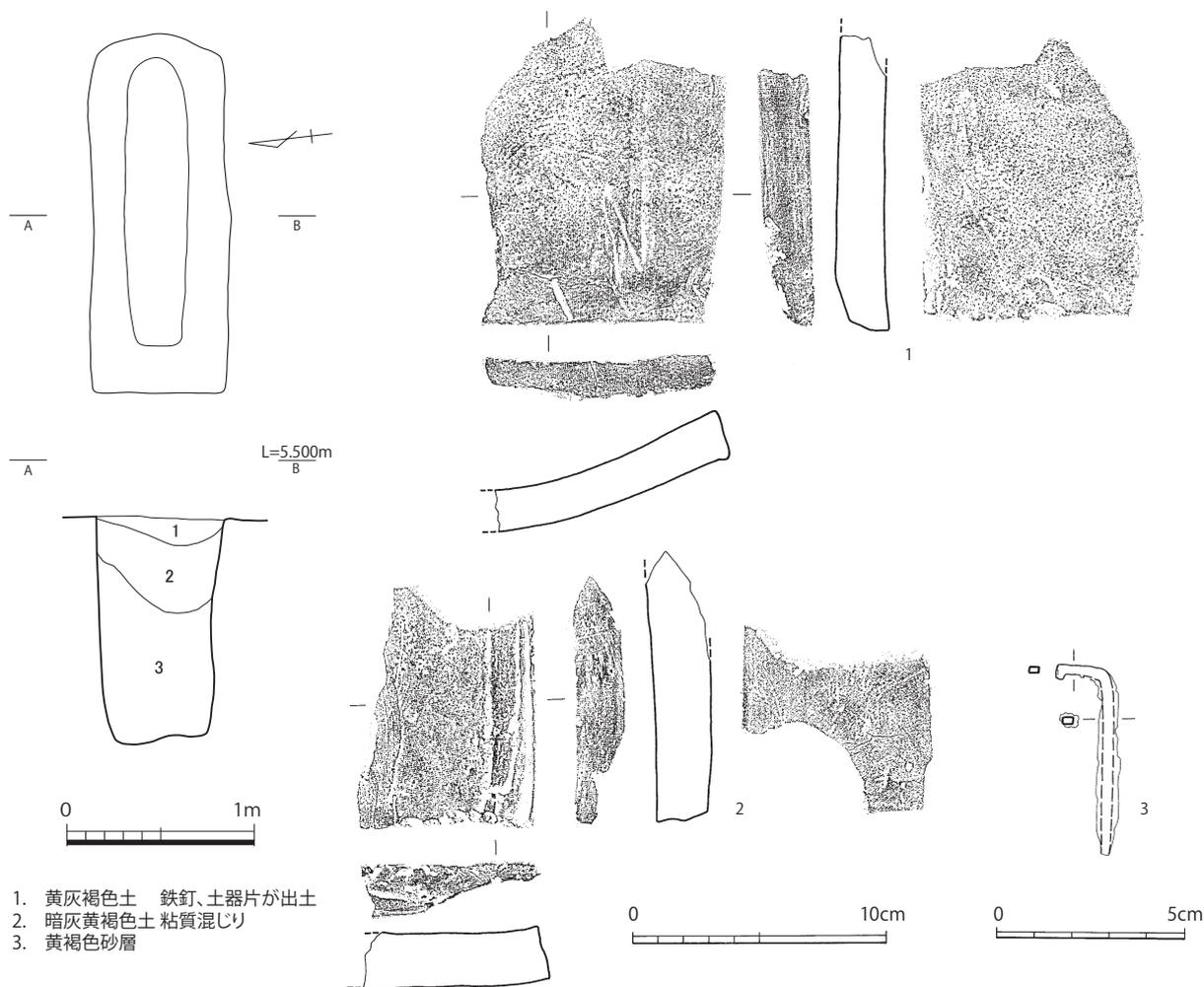
縁部片、12は直線的に開く坏の口縁部。13・14は坏底部片で高台は外側に付される。これらの須恵器は9世紀前葉頃に置かれよう。

09-SK002 (第6-5図)

調査区南側AA67区に位置する長方形土坑。長軸1.94m、短軸0.74m、深さ1.26mを測り、断面は長方形に近い形状をなす。土層は3層に分かれるが、平瓦片や釘は1層の検出面に近い部分から出土し、釘は1点のみであり土坑墓ではないと考えられる。遺構の時期はⅠ～Ⅶ期のどこに帰属するか判然としないが、15世紀後半から16世紀代(Ⅳ～Ⅶ期)の遺構埋土とは色調や土質に差が認められることから、それ以前のⅠ～Ⅲ期(14世紀～15世紀前半)に属する可能性が高い。

09-SK002出土遺物(第6-6図)

1・2は平瓦片、器面はナデ調整による。3は鉄釘で長さ6cm、重さ3.8gを測る。

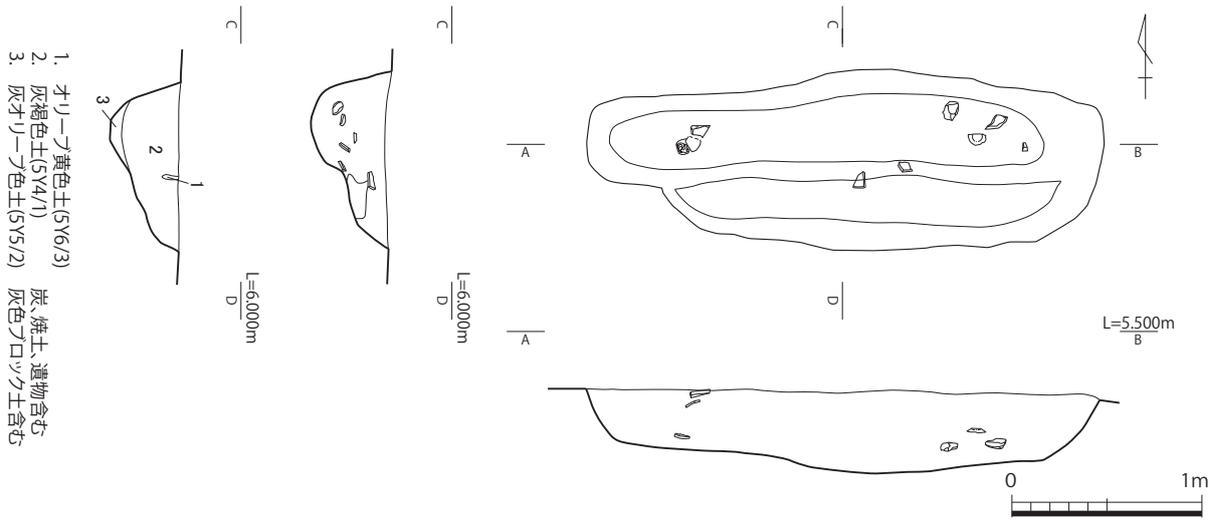


第6-5図 09-SK002実測図(1/40)

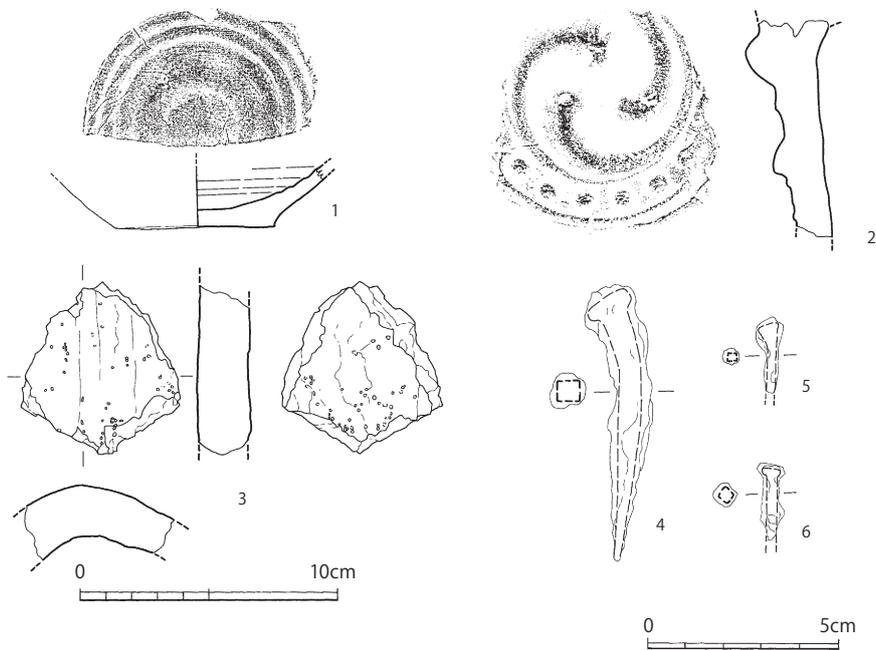
第6-6図 09-SK002出土遺物(瓦1/3、釘2/3)

09-SK003 (第6-7図)

AB66区と67区の境に位置し、長軸2.72m、最大幅0.97mを測り東西方向に延びる楕円状土坑で、南側は二段掘となる。二段目の床面の深さは最も深い所で0.43m。廃棄土坑と考えられ遺物の出土は少なく、特異な状況も観察されなかった。本遺構は、1点ではあるがロクロ目土師器の出土からⅣ～Ⅴ期(15世紀後半～16世紀前半)の所産と考えられる。



第6-7図 09-SK003実測図 (1/40)



第6-8図 09-SK003出土遺物 (1～3 (1/3)、4～6 (2/3))

09-SK003出土遺物 (第6-8図)

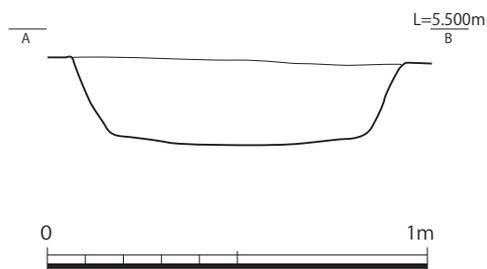
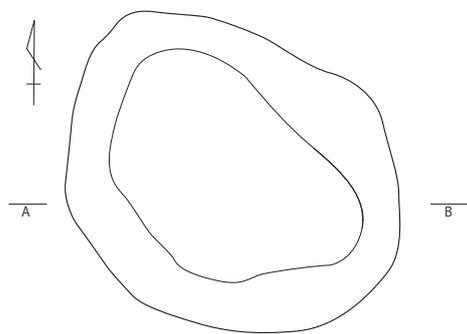
1はロクロ目土師器の底部片。回転糸切離しによるがその後のナデのため明確ではない。2は珠文の内部に巴文の瓦当文が施された軒丸瓦片、3は轡羽口片で内外面に銅滓の細片が付着している。4～6は大小の鉄釘で、4の全長は7.3cm。

09-SK004 (第6-9図)

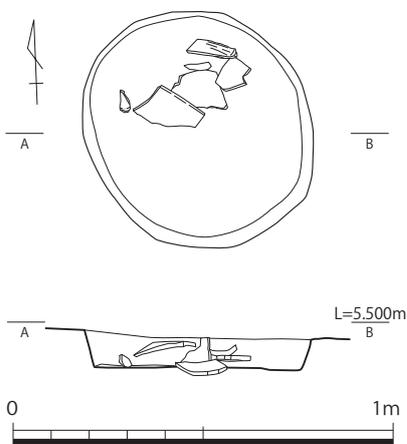
北東部に形成された不整楕円形を呈する土坑で、長軸0.98m・短軸0.74m・深さ0.22mを測る。遺物は少ないが京都系土師器片の出土からVI～VII期 (16世紀前半～後半) の所産である。

09-SK004出土遺物 (第6-10図)

1は口縁端部周辺が外反して開く京都系土師器で、口径14cmを測る。2は口縁部の外反が弱くやや直線的に開く京都系土師器で、口径13.6cm。



第6-9図 09-SK004実測図 (1/20)



第6-11図 09-SK005実測図 (1/20)

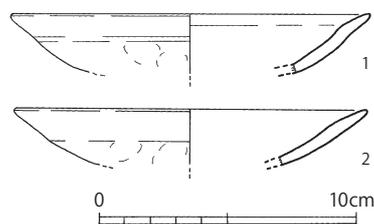
09-SK005 (第6-11図)

SK004の南東0.5mにあり、平面は楕円形をなし長軸0.65m・短軸0.58m・深さ0.08mを測る廃棄土坑。常滑焼の甕または壺の破片や平瓦片が出土しており、常滑焼も頸部から胴部片で時期決定に苦慮するがⅡ～Ⅴ期(14世紀後半～16世紀前半)に置かれるものであろう。

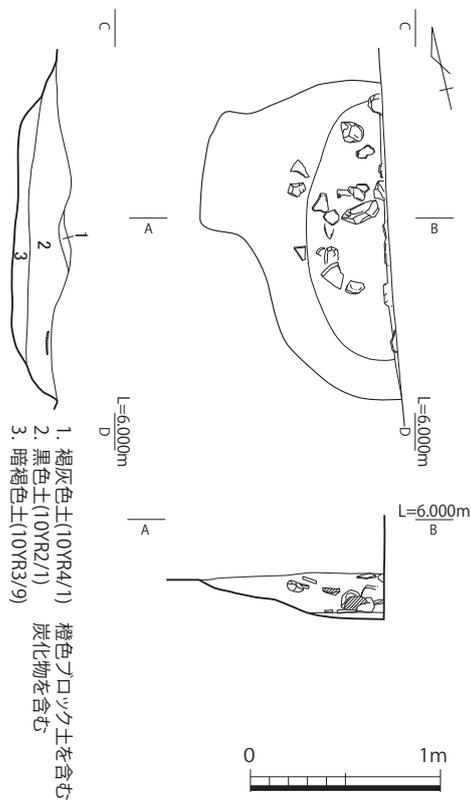
09-SK005出土遺物(第6-13図)

常滑焼壺

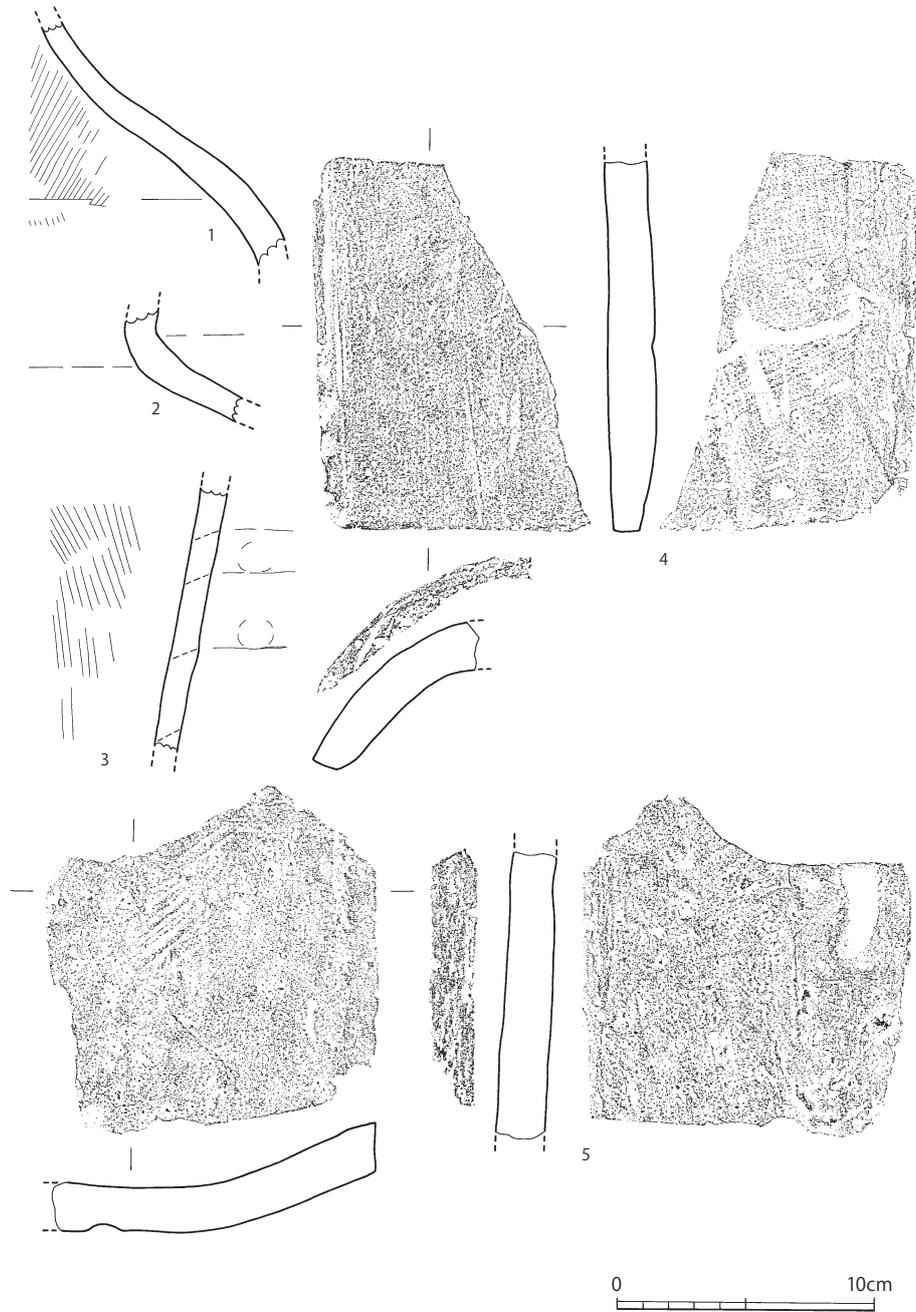
1・2は常滑焼壺の肩部片、1の外面上には斜め方向のハケ目状の調整痕が認められ、1の外面上には自然釉がかかる。3は胴下半部の破片、外面はハケ目状調整であり胎土や色調から2と同一個体と思われる。4は丸瓦片で外面はナデ調整、内面に布目痕と吊り紐痕が残り下端部はケズリ調整による。5は胎土に石英を多く含む佐賀産平瓦。



第6-10図 09-SK004出土土器 (1/3)



第6-12図 09-SK006実測図 (1/40)



第6-13図 09-SK003出土遺物 (1/3)

09-SK006 (第6-12図)

AB67区東端部に設けられた廃棄土坑で東半部分は調査区の外に続く。現存長1.68m・深さ0.25mを測り、断面は皿状をなし、やや多くの礫と少数の瓦片等が出土した。時期決定の資料に乏しいが、埋土などからV～VII期(16世紀前半～末)の遺構と推定される。

09-SK006出土遺物 (第6-14図)

1～3は平瓦片。1は内外面ナデ調整により端部はヘラによる調整で、火災による受熱により変形する。胎土に石英を含み佐賀関産平瓦。2も胎土に結晶片岩を多く含む佐賀関産平瓦。3は砂粒の少ない平瓦。



第6-14図 09-SK006出土遺物 (1/3)

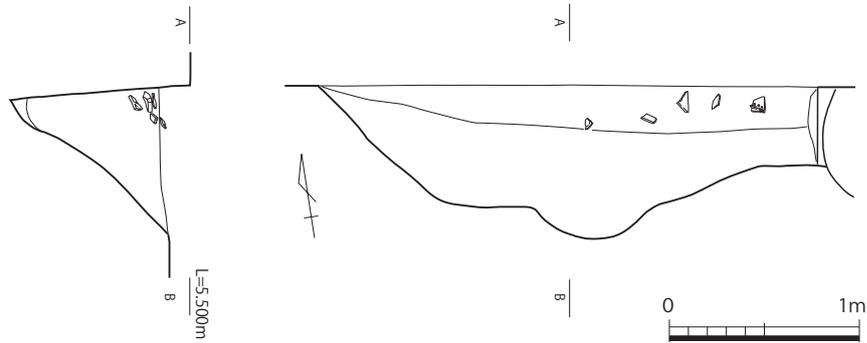
09-SE007 (第6-15図)

井戸

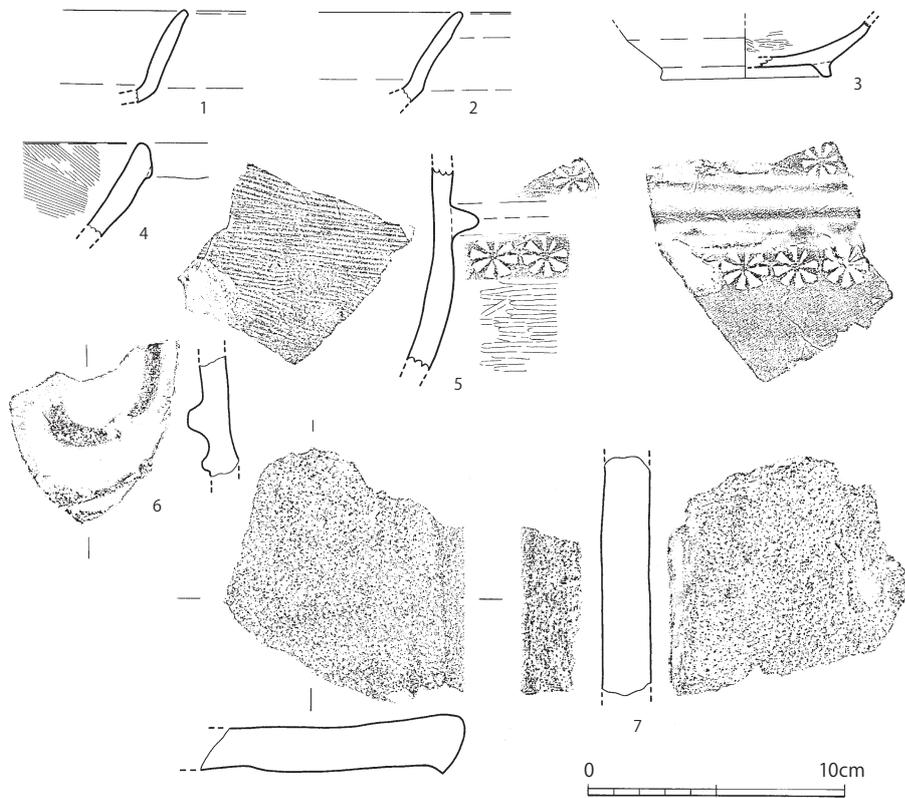
AB65区の北端部に位置する遺構であるがその大半は調査区の外となる。長軸2.6m + a と大形で東側は攪乱を受けるが、掘込みが急角度となることから井戸となる可能性が高い。遺物の多くは検出面とその周辺で検出され、土師質土器杯や瓦質土器などからIV～V期(15世紀後半～16世紀前半)に属すると考えられる。

09-SE007出土遺物 (第6-16図)

1・2は土師質器杯の口縁部、斜め上方に直線的に開くもので15世紀代に置かれる。3は内黒土器の底部で高台が三角形に近いことなどから、9世紀代と考えられる。4は内面にハケ目状の調整が残る瓦質土器鉢であるが、その産地や時期は判然としない。5は瓦質土器釜又は風炉の胴部片、外面の突帯の上下に菊花文のスタンプ文様を巡らせ、内面は横～斜め方向のハケによる調整によるもので15世紀後半の所産と見られる。6は巴文を施す軒丸瓦片。7は内外面ナデ調整の平瓦片。



第6-15図 09-SE007実測図 (1/40)



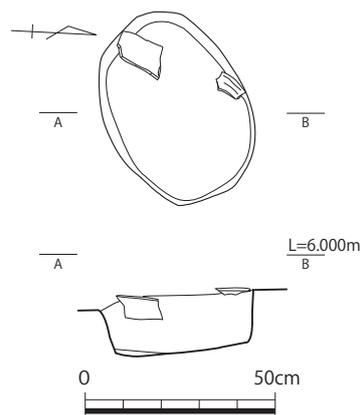
第6-16図 09-SE007出土遺物 (1/3)

09-SK010 (第6-17図)

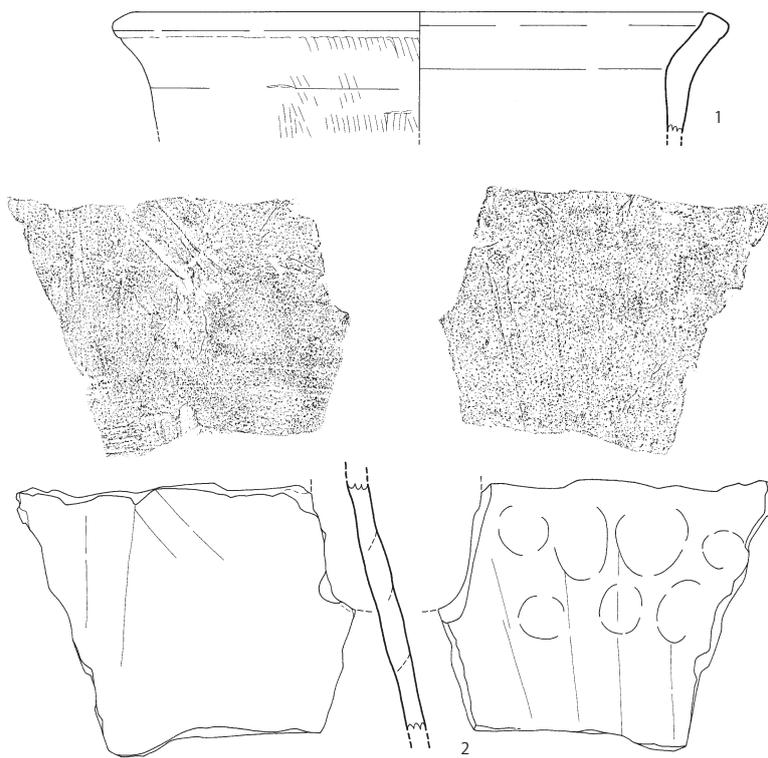
Z66区の南西部に形成された長軸0.52m・短軸0.38m・深さ0.16mの楕円形をなす浅い土坑である。検出面から土師器片が出土し、これらから8～9世紀の時期に置かれる。

09-SK010出土遺物 (第6-18図)

1は土師器甕の口縁部、外面に斜め方向のハケを施し口縁部から内面は横ナデにより、胎土に石英を多く含む。2は土師器甕の胴部片で内面に指押え痕を残し、外面は板状工具による調整で胎土に石英を多く含む。



第6-17図 09-SK010実測図 (1/20)



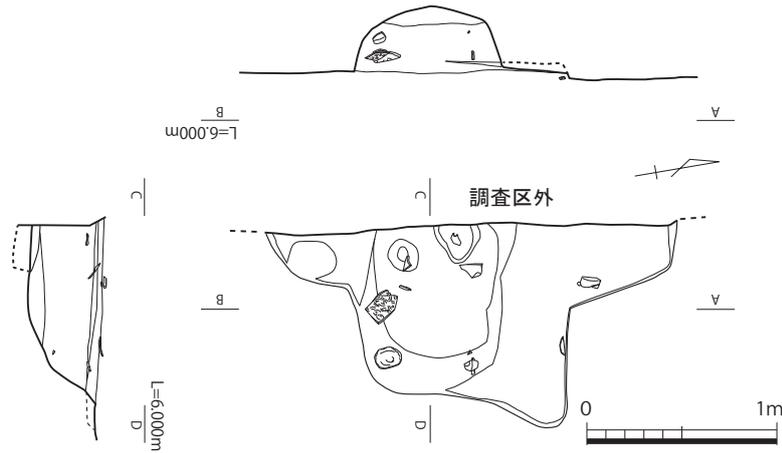
第6-18図 09-SK010出土遺物 (1/3)

09-SK013 (第6-19図)

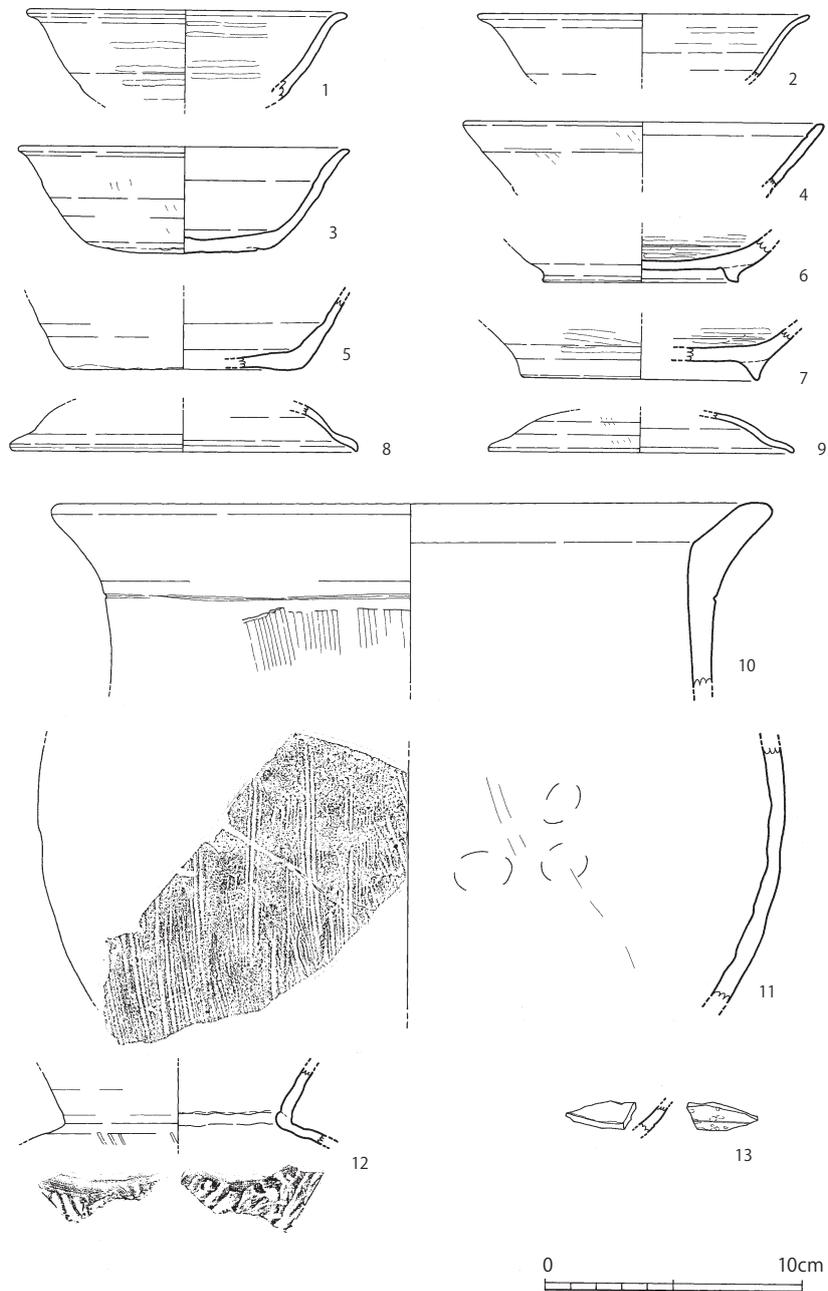
Z66区東端部に設けられた二段掘りの不定形土坑で東側は調査区の外に続く。一段目は5cm前後と浅く、二段目は楕円状をなし現存長0.8m、幅0.7m、深さ0.3mを測り、断面は浅いU字状を呈する。土師器を中心に緑釉陶器片などが検出され、9世紀中頃の遺構と見られる。

09-SK013出土遺物 (第6-20図)

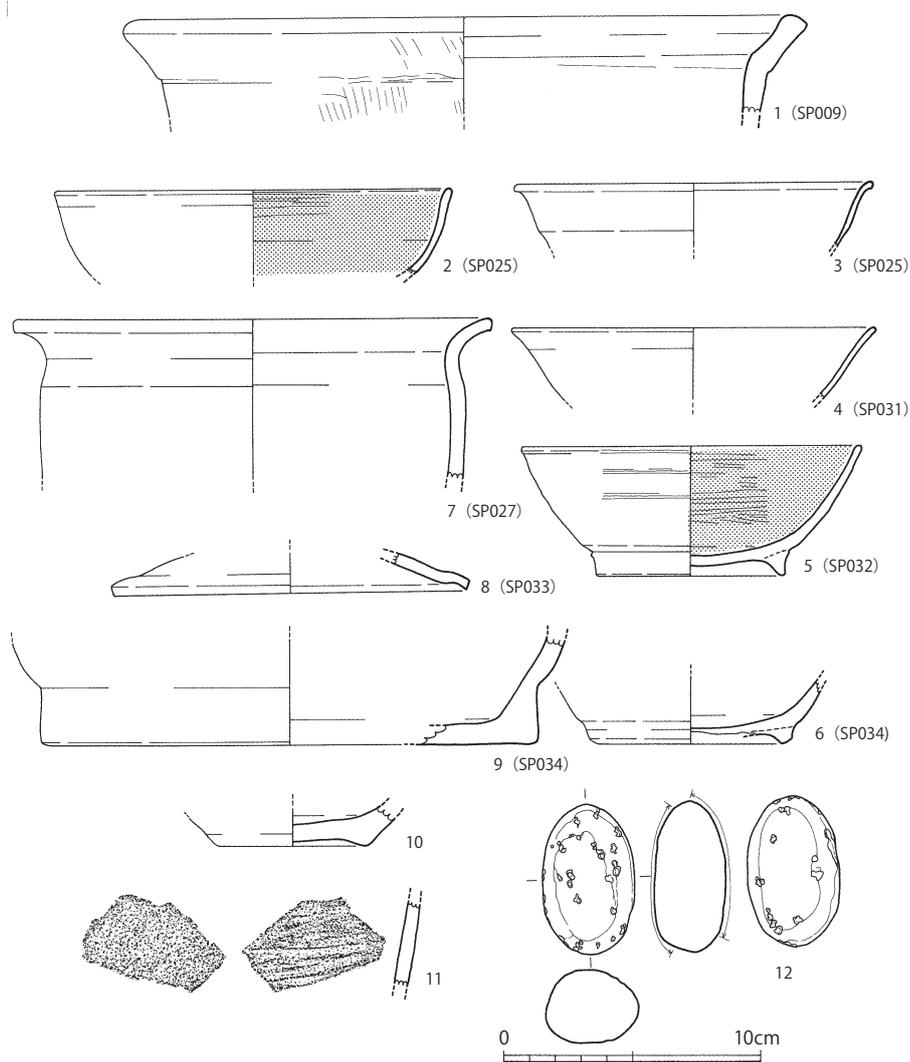
1・2は口縁部が外反して開く土師器坏または坑の口縁部、内外面の一部にヘラ磨きを加えるもので9世紀前葉頃と考えられよう。3～5は口縁部が直線的に開く土師器坏の口縁部と底部、これらは9世紀中頃に置かれる。6・7は坑の底部で9世紀前葉頃と見られるもの。8・9は土師器蓋の口縁部片で、坑の底部と同時期と考えられよう。10は土師器甕の口縁部から胴部片、胴部外面に縦方向のハケを施し他はナデ調整で8世紀後半から9世紀前葉頃に置かれる。11は土師器甕の胴部片でやや丸みを帯び10と同時期か。12は須恵器壺の頸～胴部片。13は緑釉陶器皿の体部片で、淡緑色の釉が両面に施されており9世紀前半の所産か。



第6-19図 09-SK013実測図 (1/40)



第6-20図 09-SK013出土遺物 (1/3)



第6-21図 柱穴・包含層出土遺物 (1/3)

柱穴・包含層出土遺物 (第6-21図)

1～9は柱穴から出土した土器類でZ66区西側に形成されたものが多い。1は外面に縦方向のハケ目を施す土師器甕の口縁部片で8世紀後半に置かれよう。2・3は内黒土器壺と土師器壺で9世紀前半の所産、4も同時期に置かれる壺の口縁部片。5は口径13cm、器高5.1cmを測る内黒土器壺で内面にやや粗いミガキを加えるもので、6の底部も含め前記3点と同じ時期に置かれる。7は内外面ナデ調整の土師器甕で8世紀後半に置かれるものか。8は土師器蓋の口縁部片で9世紀前半に比定されよう。9は内外面に淡緑灰色の釉を施す灰釉陶器壺?の底部片、平底をなし胎土は須恵質であり9世紀代の所産か。

灰釉陶器?

10～12は東西トレンチの包含層出土遺物。10はやや低い上底をなす浅鉢の底部片で縄文後期後葉に置かれるものか。11は外面に条痕調整を施す深鉢の胴部片で縄文後～晩期と考えられる。これらの土器はローリングにより器面が磨滅している。12は安山岩製の敲石。